

鍼灸甲乙經卷之二

十二經脉絡脉支別 第一上

雷公問曰、禁脉之言、

『靈枢』經脉篇第十 同。(L5-1a-03)

『太素』卷八經脈之一 同。(P.95-05)

【馬蒔】禁脉當作「禁服」。本經第四十八《禁服篇》云：「凡刺之理、經脉爲始、營其所行、知其度量。内刺五藏、外刺六府。」則此篇數語、乃出於《禁服篇》也。

【意訳】「禁服」は当然「禁服」とすべきだ。本經第四十八禁服篇に「凡そ鍼灸の道理は、先ず經脈を熟知し、その流注を把握し、各經の氣血の度量を知った上で、病が内部に在れば五藏を刺し、外部に在れば六府を刺す」と云う。即ちこの篇の數語は、禁服篇に出てくるものだ。

【張介賓】脈當作服。即本經禁服篇也。

【意訳】「脈」は「服」とした方がよい。即ち本經禁服篇のことである。

【澁江抽齋】正統刊本『甲乙經』正作「禁服」、不誤。

【意訳】正統刊本『甲乙經』は正しく「禁服」に作り、誤りが無い。(古典研の『甲乙經』は正統刊本ではなく、何なのか。) (荒川氏…持っていないので知りません。お問い合わせください。人民衛生出版社の古い本を拡大コピーしたものであれば、人民衛生出版社の古い版は、いくつかの版本をつぎ合わせたり、見にくいところを手書きで修正したりした本です。一般に、『甲乙經』で使われる本は、明・呉勉学『古今医統正脈全書』所収のものです(略称Ⅱ医統「正脈」本)。それ以外の刊本は出回っていないと思います。「正統刊本」自体も残っておらず、それを書き写したと称するものが、国立公文書館内閣文庫に現存します(最初の三卷のみ)。その序文のあと、目次の前に「正統丁巳重刻」とあります。なお、この正統本について、黄龍祥は偽書としています。)

凡刺之理、經脉爲始。願聞其道。

『靈枢』凡刺之理、經脉爲始、營其所行、制其度量、内次五藏、外別六府。願盡聞其道。

黄帝曰、人始生、先成精、精成而腦髓生。骨爲幹、脉爲營、筋爲剛、肉爲墻、皮膚堅而毛髮長。穀入于胃、脉道以通、血氣乃行。雷公曰、願卒聞經脉之始生。(L5-1a-03)

『太素』同。(P.95-05)

黄帝答曰、經脉者、所以決死生、處百病、調虛實、不通也。

『靈枢』黄帝曰、經脉者、所以能決死生、處百病、調虛實、不可不通。(L5-1a-08)

『太素』同。(P.95-08)

【馬蒔】『素問』二部九候篇云、「必先知經脉、然後知病脉」。此經脈之所當知也。

注①：(S6-12b-07)

【意訳】『素問』三部九候篇に云う、「必ず先ず経脈を知り、然る後に病脈を知る」と。これが経脈を知らねばならない理由である。

肺手、太陰之脉、起於中焦、

『靈枢』(L5-1a-09)『太素』(P95-10)同。

『三十一難』中焦者、在胃中脘。不上不下、主腐熟水穀。其治有齊傍。

【意訳】中焦は、胃の中脘に在る。水穀をここに留め置いて腐熟させることを主る。その治療穴は、臍の兩傍(の天枢)である。

(『靈樞講義』のここに三十一難がある理由は、明・楊珣『鍼灸集書』が引用しているためと思われる。)

【滑壽】起、發也。中焦者、在胃中脘、當臍上四寸之分。手太陰肺起於中焦、受足厥陰之交也。

注①起發也・『十四經發揮』「起發也。絡、繞也。還、復也。循、巡也、又依也、治也。屬、會也。大腸、註見本經。胃口、胃上下口也。胃上口、在臍上五寸上腕穴。下口在臍上二寸下腕穴之分也。膈者、隔也。凡人心下、有膈膜與脊脅、周回相著。所以遮膈濁氣、不使上薰於心肺也。手太陰起於中焦、受足厥陰之交也。中焦者、在胃中脘、當臍上四寸之分。」

以後【滑壽】は凡て『十四經發揮』に依る。

【意訳】「起」は、「発する」である。中焦は胃の中脘に在り、臍上四寸の処である。手の太陰肺経は中焦に起り、足の厥陰と交わる。

【楊珣】(『鍼灸集書』云)起、興也。

【意訳】「起」は、「興くる」である。

【馬蒔】此言肺經脈氣之行。乃爲第一經之經脈也。言肺者、即手太陰之脈也。凡言手者、以其井榮俞經合等穴、自手而始也。凡言足者、以其井榮俞經合等穴、自足而始也。

【意訳】ここは肺経の脈氣の行りを言う。乃ち第一經の経脈である。肺とは即ち手の太陰の脈を言う。凡そ手と言うのは、その井榮俞經合等の穴が、手から始まるからである。凡そ足と言うのは、その井榮俞經合等の穴が、足から始まるからである。

【張介賓】手之三陰、從藏走手。故手太陰脈發於此。凡後手三陰經、皆自内而出也。愚按此十二經者、即營氣也。營行於脈中、而序必始

於肺經者。以三脈氣流經、經氣歸於肺、肺朝百脈、以行陰陽

於足、厥陰肝經而又傳於肺、終而復始、是爲一周。

【意訳】手の三陰は、藏より手に走る。故に手の太陰の脈はここ中焦に発する。凡そ他の手の三陰経も、皆内より出ていく。按ずるにこの十二經は、即ち營氣である。營氣は脈中

を行り、順番は必ず肺経に始まる。そして脈氣は経脈を流れ、經氣は肺に帰するので、肺は百脈を朝し、陰陽を行らして、五藏六府は皆氣を受ける。故に十二經は肺経を以て始めとし、順序に循い相伝え、足の厥陰肝経に尽きてまた肺に伝え、終わってまた始まり、こ

ここに一周を為す。

【張志聰】曰、肺ト、脈者、乃有形之藏府經脈。曰、太陰者、無形之六氣也。……榮氣之道、納穀爲實。穀入於胃、乃傳之肺。肺脈起於中焦之胃脘、下絡大腸、還循胃口、而復上膈屬肺。

【意識】肺と曰い脈と曰うのは、乃ち形有る藏府經脈である。太陰と曰うのは、形無き六氣（の一つ）である。……榮氣の働きでは、飲食物を取り入れることが重要である。飲食物が胃に入り、それを肺に伝える。肺脈は中焦の胃脘に起こり、下って大腸を絡い、還って胃口を循り、また横隔膜に上り肺に属す。

下絡大腸

『靈枢』(L5-1a-09) 『太素』(P.95-10) 同。

【滑壽】絡、繞也。由是循任脉之外、足少陰經脉之裏、以次下行、當臍上一寸、水分穴之分、繞絡大腸、手太陰陽明、相爲表裏也。

【意識】「絡」は、繞うこと。これに由り任脈の外、足の少陰腎經の裏を循り、順番に下行し、臍上一寸の水分穴の処に当たり、大腸を繞絡し、手の太陰と陽明とは、互いに表裏を為す。

【馬蒔】絡、猶兜也。如今人横線爲絡而兜物也。

【意識】「絡」は、丁度兜（兜）むと同じ。今の人は横（に結ぶ）線を絡脈として物を包むかのような働きとする。

【張志聰】六藏之脉、屬藏絡、府、六府之脉、屬府絡、藏。藏府相連、陰陽相貫。

【意識】六藏の脈は藏に属し府を絡い、六府の脈は府に属し藏を絡う。藏府は相連なって、陰陽は相貫ぬく。

【張介賓】按、十二經相通、各有表裏。凡在本經者、皆曰屬、以此相通、彼者、皆曰絡。故在手太陰、則曰屬肺絡、大腸、在手陽明、則曰屬大腸絡、肺。彼此互更、皆以本經爲主也。下文十二經、皆放此。

【意識】按ずるに十二經は相通して、各々表裏が有る。一般に本經に在るものは、皆「属」と曰い、こちらからあちらに通ずるものは、皆「絡」と曰う。故に手の太陰に在れば、肺に属し大腸を絡うと曰い、手の陽明に在れば、大腸に属し肺を絡うと曰う。彼と此とは互いに更わり、皆本經を以て主と為す。下文十二經は、皆これに倣う。

還循胃口

『靈枢』(L5-1a-09) 『太素』(P.95-10) 同。

『銅人』還作環。

注①『銅人』：『銅人腧穴針灸図経』宋・王惟一撰。一〇二七年宋医官院木板刊行。

【意識】「還」を環に作る。（蓬左文庫本石刻『銅人腧穴鍼灸図経』十二經脈氣穴經絡圖は「還」に作る。また蓬左文庫本には、以下の注なし。渋江全善はおそらく金・大定本による。）

『銅人』胃口^{トハ}、謂^フ胃^ノ之上口、賁門^ノ之位^ニ也。

【意訳】胃口とは、胃の上口、賁門の位置を謂う。

【滑壽】還^ハ、復也。循^ハ、巡也、又依^ル也、沿^セ也。胃口^{トハ}、胃^ノ上下口也。胃^ノ上口、在^リ臍上五寸上腕穴^ニ。下口、在^リ臍上二寸下腕穴之分^ニ也。

【意訳】「還」は、復すこと。「循」は、巡ること、また依ること、また沿う（沿は沿の俗字）こと。胃口とは、胃の上下口のこと。胃の上口は、臍上五寸の上腕穴に在る。下口は、臍上二寸の下腕穴に在る。

（『薛氏醫案』所収の『十四経發揮』には、「沿」と書いてある。和刻本は「治」に誤る。）

【張介賓】自^リ大腸^ニ而上^リ、復^ル循^ル胃口^ヲ。

【意訳】大腸から上り、戻って胃口を循る。

（『類経』にもこの上に「還、復也」とある。復^ル返、還。《爾雅・釋言》：「復、返也。」）

上^テ膈^ニ屬^ス肺^ニ。

『靈枢』(LS-1a-09)『太素』(P.95-10)同。

【滑壽】屬^ハ、會也。膈者、隔也。凡^ソ人心下^ニ有^リ膈膜^ニ、與^ニ脊脇^ニ周回^シ相着^シ、所^ニ以^テ遮^ル隔^シ濁氣^ヲ、不^レ使^メ上^テ薰^ニ於心肺^ニ也。屬^ニ會^シ於肺^ニ、榮氣有^レ所^ニ歸^ス於本藏^ニ也。

【意訳】「属」は会うこと。「膈」は隔てること。そもそも人間の心下部には横隔膜が有つて、背と脇とを周回して附着しており、濁気を遮隔し、上つてきて心肺を薰蒸しないようになっている。肺に属会することで、榮気は本（來の）藏に帰するようになる。

【張介賓】人^ニ有^リ膈膜^ニ、居^ニ心肺^ノ之下^ニ、前^ハ齊^シ鳩尾^ニ、後^ハ齊^シ二十一椎^ニ。屬^{トハ}者、所^ニ部^ニ之謂^ニ。

【意訳】人には横隔膜が有り、心肺の下に位置し、前では鳩尾の位置に齊しく、後では第十一椎（第七胸椎）の位置に齊しい。「属」とは、部（統率される）つかさどられる／配置される（所のこと）。

從^リ肺系^ニ横^ニ出^テ腋^ニ下^ニ、

『靈枢』(LS-1a-10)『太素』(P.95-10)同。

【滑壽】肺系^{トハ}、謂^フ喉嚨^ヲ也。喉^ハ、以^テ候^シ氣^ヲ、下^ハ接^ス於肺^ニ。肩^ノ下脇^ノ上際^ヲ曰^フ腋^ト。自^リ肺臟^ニ、循^リ肺系^ヲ、出^テ而横行^シ、循^リ胸部第四行^ノ（中府）（雲門）^ヲ、以^テ出^テ腋^ニ下^ニ。

【意訳】肺系とは、喉嚨を謂う。「喉」は氣を待ち受け、下は肺に接している。肩の下で脇の上際を腋と曰う。肺臟から肺系を循り、出て横に行き、胸部の第四行の中府、雲門を循り、腋下に出る。

『銅人』腋^{トハ}、謂^フ肩^ノ之裏^ニ也。

【意訳】腋とは、肩の裏（内側・内部）を謂う。

下^テ循^リ臍内^ニ、

『靈枢』(LS-1a-10)『太素』(P.95-10)同。

『銅人』臑^{トハ}、謂^フ肩肘^ノ之間^一也。

【意訳】臑とは、肩と肘の間を謂う。

【滑壽】膊^ノ下對^{スル}腋^ニ處^ヲ爲^フ臑^ト。肩肘^ノ之間也。

【意訳】上腕（膊）の下（内側／臑＝上腕二頭筋部）で腋に対する（向かい合う）処を臑と云う。肩と肘の間である。

【張介賓】膊^ノ之内側、上^ハ至^リ腋^ニ、下^ハ至^ル肘^ニ。嫩^ト奕^{ナル}白肉^ヲ曰^フ臑^ト。〈天府〉〈俠白〉之次也。

【意訳】上腕（膊）の内側で、上は腋に至り、下は肘に至る。柔らかな白肉の部分を臑と曰う。天府、俠白の位置である。

【多紀元簡】按^{スルニ}、臑、唐韻^ニ、那到^ノ切^ト。禮少儀疏^ニ、肩脚也^ト。

【意訳】按ずるに、「臑」は、唐韻に「那到の切（ノウ）」とあり、『禮記』少儀疏に「肩脚（前脚の上部）也」とある。

行^リ少陰心主^ノ之前^一、

『靈枢』(L5-1a-10)『太素』(P.96-01)同。

『銅人』少陰〔心〕在^レ後^ニ、心主〔厥陰〕處^レ中^ニ、而大陰行^ル其^ノ前^一也。

【意訳】少陰心経は後に在り、厥陰心包経は中に居て、太陰肺経はその前を行る。

【滑壽】蓋^シ手^ノ少陰、循^リ臑臂^ヲ出^ニ手^ノ小指^ノ之端^ニ。手^ノ心主、循^リ臑臂^ヲ出^ニ中指^ノ之端^ニ。手^ノ太陰、則^チ行^ル乎^ニ二經^ノ之前^一也。

【意訳】そもそも手の少陰心経は、臑臂を循って手の小指の端に出る。手の厥陰心包経は、臑臂を循って中指の端に出る。手の太陰肺経は、この二経の前を行る。

【澁江抽齋】謂^フ手^ノ太陰^ハ出^ツ手^ノ大指^ノ之端^ニ也。

【意訳】手の太陰肺経は、手の大指の端に出ると謂う。

下^リ肘中^一、

『靈枢』(L5-1b-01)『太素』(P.96-01)同。

『銅人』尺澤穴^ノ分。

【意訳】尺沢の処。

【滑壽】臑盡^{クル}處^ヲ爲^フ肘^ト。肘、臂節也。

【意訳】上腕（臑）の尽きる処を肘という。肘は、前腕（臂）との関節である。

【張介賓】膊^ノ臂^ノ之交^ハ曰^フ肘中^ト。穴^ヲ名^{ツク}尺澤^ト。

【意訳】上腕（膊）と前腕（臂）の交わる処を肘中と曰う。穴名は尺沢。

循^リ臂内上骨^ノ下廉^一、

『靈枢』(L5-1b-01)『太素』(P.96-01)同。

『銅人』上骨、爲^フ臂^ノ之上骨^一也。下廉、爲^フ上骨^ノ之下廉^一也。

【意訳】「上骨」とは、前腕の上（橈側の）骨をいう。「下廉」とは、上骨の下側のこと。

【滑壽】肘以下^ヲ爲^フ臂^ト。廉、隅也、邊也。

【意訳】肘以下を臂という。「廉」とは、隅であり、辺である。

【樓英】〈樓氏〉『醫學綱目』云、臑下、掌上名曰臂。臂有二骨。今太陰脉循臂上骨之下廉。

【意訳】樓英『医学綱目』に云う、臑の下で、手掌の上を名付けて「臂」と曰う。臂には二つの骨が有る。今太陰の脈は臂の上骨の下廉を循る。

【楊珣】臂者、要旨論云、肘下爲臂。

【意訳】「臂」は、要旨論に「肘下を臂という」と云う。

注①要旨論…『素問要旨論』のこと。金元四大家の一人、劉完素の著作。

【張介賓】内、内側也。行、孔最、列缺、經渠、之次。骨、掌後高骨也。下廉、骨下側也。

【意訳】「内」とは、内側である。孔最、列欠、經渠の順に行る。「骨」とは、手掌の後の隆起した骨のことである。「下廉」とは、骨の下側である。

注①隆起した骨…これを橈骨茎状突起とするのは間違い。橈骨茎状突起は、橈骨の先端にある骨。手根骨に接する。脈診の関上にあたる処は、解剖学で単なる膨隆ととらえられ、解剖学としての名称は付与されていない。

【多紀元簡】張註上字、上聲、非也。

【意訳】張註で、「上」字を上声とするのは、間違いである。『類經』は「循、臂内上骨下廉」を「循、臂内、上骨下廉」とする。この動詞「上る」の発音が上声。因みに「上骨（上の骨）」の「上」は去声。

入、寸口、

【靈枢】(L5-1b-01)『太素』(P.96-01)同。

【銅人】經渠穴、在此寸口中。

【意訳】經渠穴は、この寸口中に在る。

【滑壽】手掌後、高骨、傍動脈爲關、關前動脈爲寸口。

【意訳】手掌の後の、骨の隆起した部分の傍の動脈を関とし、関前の動脈を寸口とする。

【張介賓】即太淵穴、處。

【意訳】即ち太淵穴の処である。

【張志聰】寸口、兩寸尺之動脈處。

【意訳】寸口とは、両手の寸尺の動脈の処である。

【多紀元簡】寸口、通寸關尺而言。諸註以寸部釋之、失古義矣。

【意訳】寸口とは、寸関尺を通して言う。諸註が寸部を以てこれを解釈するのは、古義を失っている。

上、魚、循、魚際、

【靈枢】(L5-1b-01)『太素』(P.96-01)同。

【銅人】魚、謂手、大指之後也。以其處如魚之形、故曰魚。魚際、謂手魚之際、有穴居此、故名曰魚際也。

【意訳】「魚」とは、手の大指の後を謂う。そこが魚のような形をしているので、魚と曰う。「魚際」とは、手魚の際を謂い、そこに穴が有りそこに居るので、名付けて「魚際」

と曰う。

【滑壽】謂_フ掌骨_ノ之前、大指本節_ノ之後_ヲ。其_ノ肥肉隆起_{スル}處、統_{ヘテ}謂_フ之_ヲ魚_ト。魚際_ハ則_チ其_ノ間_ノ之_ノ穴名也。

【意訳】掌骨（手根骨）の前で、大指本節（第一基節骨）の後を謂う。その肥えた肉の隆起する処を、統べて魚と謂う。「魚際」は即ちその間の穴名である。

【張志聰】魚際_{トハ}、掌中大指_ノ下、高起_ノ之_ノ白肉、有_リ如_キ魚腹_ノ、因_テ以_テ爲_ス名_ト。

【意訳】「魚際」とは、掌中大指（第一基節骨）の下で、盛り上がった白肉が、魚の腹のようなので、名付けられた。

出_ツ大指_ノ之_ノ端_ニ。

『靈枢』(L5-1b-01)『太素』(P.96-01) 同。

『銅人』(少商)穴、分也。

【意訳】少商穴の処。

【滑壽】端_{トハ}、杪_{トハ}也。

【意訳】端とは、末（杪）のこと。

【張介賓】端_{トハ}、指尖(指_ノ尖)也。手_ノ太陰肺經_ハ、止_ニ於_ニ此_ニ。

【意訳】端とは、指尖である。手の太陰肺経は、ここで終わる。

【汪昂】經別篇_ニ又云_フ、上_リ出_テ缺盆_ニ、循_ル喉嚨_ヲ。

注①…「手_ノ陽明_ノ之_ノ正_ハ、從_リ手_ノ循_ル膈_ヲ乳_ヲ、別_ニ於_ニ肩髃_ニ、入_リ柱骨_ニ、下_テ走_リ大腸_ニ、屬_シ于_ニ肺_ニ、上_テ循_ル喉嚨_ヲ、出_テ缺盆_ニ、合_{スル}于_ニ陽明_ニ也。」(L6-2a-09)

【意訳】經別篇には「上つて欠盆に出て、喉嚨を循る」と云う。

其_ノ支_{ナル}者_ハ、

『靈枢』(L5-1b-02)『太素』(P.96-01) 同。

『銅人』鍼經_ニ曰_ク、支_ハ而_レ横_{スル}者_ヲ爲_ス絡_ト。此_レ手_ノ太陰_ノ之_ノ絡_ニテ、別_レ走_ル陽明_ニ者也。

穴名_ハ列缺。

注①鍼經…『靈枢』脉度篇第十七「經脉爲_レ裏、支而横者爲_レ絡、絡之別者爲_レ孫。」(L8-3a-01)

【意訳】鍼經に「支れて横にいくものを絡と為す」と曰う。これは手の太陰の絡であり、別れて陽明大腸経に走るものである。穴名は列欠。

【馬蒔】其_ノ支_{ナル}者_{トハ}、如_ク木_ノ之_ノ有_ル枝_、以_テ其_ノ自_リ直_行之_ノ脉_ニ而_レ旁_ラ行_ル之_ヲ也。

【意訳】その支なる者とは、木に枝が有るように、その直行する脈より別れて傍らを行くものである。

【張介賓】此_レ以_テ正_ノ經_ノ之外_ニ、而_チ復_タ有_ル旁_通之_ノ絡_ト也。

【意訳】これは正経の外に、更に傍らに通じる絡脈が有るからである。

從_リ腕_ノ後_、直_チ出_テ次_ニ指_ノ内_ノ廉_ニ、出_ツ其_ノ端_ニ。

『靈枢』(L5-1b-02)『太素』(P.96-02) 同。

『銅人』手_ノ太陰_、自_レ此_レ交_ハ入_リ手_ノ陽明_ニ。

【意訳】手の太陰はここから手の陽明に交わり入る。

【滑壽】臂骨盡處爲腕^②。

注①臂骨…前腕骨。橈骨はその上骨、尺骨は下骨という。

注②腕(てくび)…腕関節を、今は手関節という。

【意訳】前腕骨(臂骨)の尽きる処を手関節という。

【張介賓】臂^ト掌^ノ之交^ヲ曰^フ腕^ト。此^レ本^レ經^ノ別^レ絡^ニ從^リ腕^後、上^側列^缺穴^一、直^チ出^テ次^指之^端、交^ニ商^陽穴^ニ、而^接乎^手、陽^明經^一也。

【意訳】臂と掌との交わる処を腕(関節)と曰う。これは本経の別絡であり、手首の後の上側の列欠穴より、直ちに次指の端に出て、商陽穴に交わり、手の陽明経に接続する。

【張志聰】其^ノ旁^ヲ而^支行^者、從^リ列^缺分^一、行^リ手^腕後^一、循^リ合^谷、上^行手^食指^ノ之^端、以^テ交^ニ手^陽明^大腸^經之^商陽^ニ。

【意訳】その傍らより別れて行るものは、列欠から手関節の後を行り、合谷を循り、上つて手の食指の端に行り、以て手の陽明大腸経の商陽に交わる。

是動

『靈枢』(L5-1b-02)『太素』(P.96-02)同。

【澁江抽齋】坊本、上有^ニ「黄帝曰^フ肺手^ノ太陰也^一」八字^一。蓋^シ因^{リテ}『類経』正文^一而^誤衍^{スル}也。以下放^レ此^ニ。

【意訳】『坊本』は、この上に「黄帝曰く肺手の太陰也」の八字が有る。『類経』正文に因て、誤つた衍文である。以下これに倣う。

注①『坊本』…周日校本と称する日本製の本。『類経』から『素問』『靈枢』を復元した。『類経』では何巻何番目に対応するかを欄外頭注として記し、『類経』の注をすぐ探せるようにした本(『靈枢識』もこれを底本としている)。のちに欄外の『類経』での所在箇所の注を削つた本が出回つた。『鍼灸医学典籍大系』所収本がそれ。『類経』では、流注は卷七経絡類に、是動所生病は卷十四疾病類にある。そのため、張介賓は卷十四疾病類において、「是動」の前に『靈枢』経文にない「肺手太陰也」(肺手太陰である)等の語句を補つた。

【張介賓】動^ト、言^フ變^也。變^ト、則^チ變^レ常^ヲ而^爲病^ト也。如^キ陰^陽應^象大^論曰^フ、^中在^{リテ}變^動爲^シ握^爲、上^レ噦^ト之^類、即^チ此^ノ之^謂。

【意訳】「動」とは変を言う。「変」とは正常が変じて病になることである。『陰陽応象大論』に「變動に在りては握と爲し、噦と爲す」曰うような類は、即ちこれである。

注①…在變動爲握(S2-4b-06)、在變動爲憂(S2-5a-06)、在變動爲噦(S2-5b-08)、在變動爲欬(S2-6a-07)、在變動爲慄(S2-6b-06)。

則病肺脹滿、膨膨然、而喘咳、

『靈枢』則病肺脹滿、膨膨^然、而喘咳、(L5-1b-03)

『太素』同。(P.96-02)

【銅人】膨膨^ト、謂^フ氣^不宣^暢也。

【意訳】「膨膨とは、気が伸びやかに行き渡らないことを謂う」と。

【馬蒔】肺發^シ脹^滿、致^ス膨^膨然^{タル}。俗^ニ云^フ膨^膨、本^レ經^ノ脹^論云^フ、肺^脹者[、]虛

滿而喘欬^{スト}。

注①：(L11-8a-08)

【意訳】肺が脹滿を發症して、パンパンに膨れた状態にまでなる。俗に膨脹とも云う。『靈枢』篇第三十五脹論に云う「肺脹は、虚滿して喘欬す」と。

缺盆^ミ中痛^ミ、

『靈枢』(L5-1b-03)『太素』(P-96-02)同。

『銅人』缺盆^ハ、穴名。在^リ肩下横骨^ノ陷中^ニ。言^フ其^ノ處如^キ缺豁^ノ之盆^ノ。故名^ニ曰^フ缺盆^ト。

【意訳】欠盆は穴名。肩下の横骨（鎖骨）の陷凹の中に在る。その場所が欠けたお盆のようなので言う。故に名付けて欠盆と曰う。

【張介賓】缺盆^ハ、雖^モ十二經^ノ之道路^ト、而肺^ハ爲^ス尤^モ近^キ。故^ニ肺病^ム則^チ痛^ム。

【意訳】欠盆は十二経全てが通る道路であるが、肺はここに最も近い。故に肺が病めば痛む。

甚^{シキ}則^チ交^{ヘテ}兩手^ヲ而瞽^ス【音務、又音茂】。

『靈枢』(L5-1b-03)『太素』(P-96-02)同。

【史崧】瞽、音務。

『銅人』注^ニ引^{キテ}『大素』注^ラ云^フ、瞽^ハ、低^ク目^ト也^ト。

【意訳】『銅人腧穴鍼灸図経』は、注に於いて『太素』の注を引いて「瞽とは、目を低くする（伏し目がちになる）こと」と云う。

【馬蒔】交^{ヘテ}兩手^ヲ而掣^グ瞽^ス。

【意訳】両手を交叉して痙攣し、目がはっきり見えなくなる。（例えば過換気症候群の症状＝痺れ、筋肉硬直痙攣、意識混濁などの神経・筋肉症状。）

【張介賓】瞽、木痛^ハ不仁^ス也^ト。

【意訳】瞽とは、痺れ痛んで、不仁となるもの。（木…麻木。しびれて感覚が鈍くなったり、知覚が失われる。）

【汪昂】瞽、音茂、迷亂也。

【意訳】瞽、音は茂（モ）、迷い乱れること。

【張志聰】瞽、目垂^ル貌^ト。

【意訳】瞽とは、眼瞼下垂の貌。

【多紀元簡】按^{スルニ}『玉篇』^ニ、瞽^ハ、目不^レ明^ラ貌^ト。又『楚辭』九章、中悶瞽^ノ之^レ惛惛^ト。註^ニ、煩亂也^ト。諸註俱^ニ誤^ル。

【意訳】按ずるに、『玉篇』に「瞽は、目が明らかでない様子」と。また『楚辭』九章「中、悶瞽して之れ惛惛たり」の註に「煩乱である」と。諸註家は共に誤っている。

【澁江抽齋】按^{スルニ}、王冰〔素問五常政大論及^ヒ氣交變大論次注〕曰^ク、瞽^ハ、悶也^ト。某氏、

〔正保中人〕十四經發揮抄云^フ、甚^{シキ}者^ハ、蓋^シ謂^フ缺盆痛^ノ之^レ甚^{シキ}也^ト。以^テ其^ノ痛^ミ甚^シ

故^ニ不能^ク安措^ク手^ヲ、而相^ニ交^{ヘテ}兩手^ヲ、以^テ爲^ス忍^レ痛^ミ之^レ力^ト也^ト。瞽^ハ、昏

悶^メ目不^レ明^ラ之^レ義^ト。亦通^ス。

【意識】按ずるに、王冰は『素問』五常政大論、及び氣交變大論次注に曰く「膂は、悶えることである」と。某氏（正保年間の人）は『十四經發揮抄』に云う、「（甚し）とは、思うに欠盆の痛みが甚しいことを謂う。その痛みが甚しいので、手を普段通りにはしておけず、両手を交えて痛みを忍ぶ力とするのだ。《膂》は、昏悶して目が明らかでないこと。これもまた意味は通じる」と。

是謂^レ擘^ニ厥^ト。

『靈樞』(L5-1b-04)『太素』(P.96-03) 此爲^レ臂^ニ厥^ト。

『銅人』肘前^ヲ曰^ヒ臂^ト、氣逆^ヲ曰^ヒ厥^ト。

【意識】肘前を「臂」と曰い、氣逆を「厥」と曰う。

【馬蒔】臂氣厥逆。肺脉由^リ中府^ニ出^テ腋^ニ、循^リ臑^ヲ下^リ肘^ヲ入^ル手^ニ。

【意識】臂氣厥逆。肺脉は中府より腋に出て、上腕を循り、肘に下り手に入る。

『靈樞註証發微』馬注「交^ニ兩手^ニ而掣^レ膂^者、此之謂^ニ臂^ニ氣^ニ厥^ト逆^也」也。肺脉由中府出腋循臑下肘入手

是主^レ肺^ノ所^ニ生^{スル}病^者、

『靈樞』(L5-1b-04)『太素』(P.96-03) 同。

【馬蒔】是^レ皆^レ肺^ノ經^ノ所^ニ生^{スル}之^ノ病^耳。按^{スルニ}、難^ニ經^ニ二^ニ十^ニ二^ニ難^ニ、以^テ是^ニ動^ヲ爲^シ氣^ト、所^ニ生^{スル}爲^ス血^ト。即^チ動^生二^ニ字^ニ分^テ爲^ス氣^ト血^ト。且^ツ以^テ氣^ノ先^ニ血^ノ後^ニ爲^ス難^ト。今^ニ詳^ニ本^ニ篇^ヲ、前後^ノ辭^義分^明、不^レ以^テ所^ニ動^{スル}屬^シ氣^ト、所^ニ生^{スル}屬^ス血^ト。乃^チ難^ニ經^ノ之^ノ臆^説耳。

注①『難經』二十二難・二十二難曰、經^ニ言^フ、脈^ニ有^リ是^ニ動[、]有^リ所^ニ生^{スル}病[、]一^ニ脈^ニ變^ス爲^ス二^ニ病^ト者^何也。然^リ、經^ニ言^フ是^ニ動[、]者^氣也。所^ニ生^{スル}病^者血^也。邪^ニ在^レ氣^ニ、氣^ノ爲^ス是^ニ動[、]邪^ニ在^レ血^ニ、血^ノ爲^ス所^ニ生^{スル}病[、]氣^ノ主^ニ响^ス之^ヲ、血^ノ主^ニ濡^ス之^ヲ。氣^ノ留^マ而^レ不^レ行^者、爲^ス氣^ノ先^ニ病^也。血^ノ壅^リ而^レ不^レ濡^者、爲^ス血^ノ後^ニ病^也。故^ニ先^ニ爲^ス是^ニ動[、]後^ニ所^ニ生^{スル}也。」

【意識】これらは全て肺経が生ずる所の病である。按ずるに、『難經』二十二難に「是動を以て氣と爲し、所生は血と爲す」とある。即ち「動」と「生」二字を分けて氣血とする。且つ氣が先、血は後とするを以て二十二難の主題としている。今詳しく本篇を見ると、前後の辭義（文章の意味）は明らかであり、動ずる所を氣に属させ、生ずる所を血に属させてはいない。乃ちこれは『難經』の臆説に過ぎない。

【張介賓】按^{スルニ}、二^ニ十^ニ二^ニ難[、]以^テ是^ニ動^ヲ爲^シ氣^ト、所^ニ生^{スル}爲^シ血^ト、先^ニ病^ム爲^シ氣^ト、後^ニ病^ム爲^シ血^ト。若^シ乎^レ近^キ理^ニ。然^ニ、細^ニ察^ス本^ニ篇^ノ之^ノ義[、]凡^ニ在^レ五^ニ藏^ニ、則^チ各^々言^フ藏^ノ所^ニ生^{スル}病[、]凡^ニ在^レ六^ニ府^ニ、則^チ或^チ言^フ氣^ト、或^チ言^フ血^ト、或^チ言^フ脉^ト、或^チ言^フ筋^ト、或^チ言^フ骨^ト、或^チ言^フ津^液。其^ノ所^ニ生^{スル}病[、]本^ニ各^々有^リ所^ニ主[、]非^ズ以^テ血^ト氣^ト二^ニ字^ヲ、統^ヘ言^フ二^ニ經^ノ者^也。難^ニ經^ノ之^ノ言[、]似^{タリ}非^ズ二^ニ經^ノ旨^也。

【意識】按ずるに、『二十二難』は、是動を氣とし、所生を血とし、先に病むものを氣とし、後に病むものを血としていて、道理に近いかのである。しかし本篇の義を細かく検討すると、一般に五藏に在れば、それぞれ藏の生ずる所の病を言い、六府に在れば、氣、血、脈、筋、骨、津液と言う。その生ずる所の病は、本来それぞれに主する所が有り、血と

気の二字で十二経をまとめて言うものではない。『難経』の言は、経旨とは違うようである。

【張志聰】是動者、病因于外、所生者、病因于内。凡病有因于外者、有因于内者、有因于外而及于内者、有因于内而及于外者、有内外之兼病者。本篇統論藏府經氣。故曰肺手太陰之脉、曰是動、曰所生。治病者、當隨其所見之證、以別内外之因。又不必先為是動、後及所生、而病證之畢具也。

【意訳】「是動病」は外因により、「所生病」は内因による。凡そ病は外因によるもの、内因によるもの、外因から内因に及ぶもの、内因から外因に及ぶもの、内外因を兼ねるものが有る。本篇は藏府經氣を統一的に論じている。故に肺手の太陰の脈と曰って、是動と曰い、所生と曰う。病を治する者は、その現れる証に随い、内外の因を別けなければならぬ。またまず是動病となり、それがのちに所生病に及ぶわけでは必ずしもないが、これで病証は尽く具わっている。

【多紀元簡】馬氏以此一句為結文。二張則接下節為解。〈楊珣〉則肺下為句。蓋是動所生、其義不明晰、亦未知孰是。

【意訳】馬蒔はこの一句を結文とする。張介賓と張志聰は下節に接続して解釈する。楊珣は「肺」の下までを句とする（「……是れ肺を主る」）。思うに「是動」と「所生」は、その義が明晰でなく、また何れが正しいのか未だ判らない。

咳、上氣、喘喝

『靈樞』(L5-1b-04)『太素』(P.96-03) 欬、上氣、喘渴、

【張介賓】聲、麤急也。

【意訳】声は、粗く忙しない。

【李中梓】渴者、金令燥也。

【意訳】「渴」とは、金令（秋冷）の燥（乾燥Ⅱかわき）である。

【張志聰】肺主氣、而為水之生原。

【意訳】肺は氣を主り、水を生じる源（金生水）である。

【澁江抽齋】按、喝字是。

【意訳】按ずるに、（渴より）喝字が正しい。

『喘喝』『現訳素問』注：「喘」は呼吸困難、「喝」は呼吸困難によって発せられる声音。

煩心、胃滿

『靈樞』(L5-1b-04)『太素』(P.96-03) 煩心胸滿、

【馬蒔】肺脉貫膈而布胸中。

【意訳】肺脈は横隔膜を貫いて胸中に布く。

臈【音如】臂内前廉痛厥、掌中熱。

『靈樞』(L5-1b-05)『太素』(P.96-03) 同。

【張介賓】太陰之別、直入掌中。故為痛厥、掌熱。

【意識】太陰の別絡は、直ちに掌中に入る。故に痛厥して手掌が熱する。

【張志聰】胸滿、臍臂痛、掌中熱、皆經脈所循之部、而爲病也。

【意識】胸滿し臍臂が痛み掌中が熱するのは、皆經脈の循る所の部であるから、病むのである。

氣盛有餘、則肩背痛、風寒汗出中風、小便數而欠。

『靈樞』(LS-1b-05) 同。

『太素』氣盛有餘、則肩背痛、風寒汗出、中風不澁、數欠。(P.96-04)

【滑壽】寒字疑衍。

【意識】「寒」字は衍文ではないか。

【楊上善】肺氣盛、故上衝肩背痛也。肺脈盛者、則大腸脈盛。天有風寒之時、猶汗出、藏中、身外汗少。故曰不澁。祖夾反、謂潤洽也。有本作汗出中風、小便數而欠。陰陽之氣、上下相引、故多欠也。

【意識】肺氣が盛んなので、上衝して肩背が痛む。肺脈が盛んならば、大腸の脈も盛んである。天は風寒の時候なので、汗は藏中には出るが、身外には汗の出は少ないようだ。故に澁はと曰う。(澁は)祖夾の反(ソウ)、潤うことを謂う。有る本は「汗出で風に中り小便數にして欠す」に作る。陰陽の氣は、上下に引き合うので、欠伸が多くなる。

(ここまで楊上善注がなかったのは、仁和寺本がこの前一紙を欠くため。)

【張志聰】氣之盛虛者、謂太陰之氣也。夫三陰三陽之氣、本于陽明胃、府所生、從手陽明之五里、而散行於膚表。肺主氣而外主皮毛。是以手太陰與手足陽明、論氣之盛虛、其餘諸經、略而不論也。

【意識】氣の盛虚は、太陰の氣(の盛虚)を謂う。そもそも三陰三陽の氣は、陽明胃の府の生ずる所に基づき、手の陽明の五里より、皮膚表面に散行する。肺は氣を主り、外では皮毛を主る。こうした訳で手の太陰と手足の陽明は、氣の盛虚を論ずるが、その他の諸經は省略して論じない。

【張介賓】手太陰筋結於肩、藏附於背。故邪氣盛、則肩背痛。肺主皮毛、而風寒在表。故汗出中風、肺爲腎母、邪傷其氣。故小便數而欠。

【意識】手の太陰の經筋は肩に結び、藏は背に附く。故に邪氣が盛んになると肩背が痛む。肺は皮毛を主り、風寒の邪氣が外表に在る(張も楊上善と同じく時候の風寒とする)。故に発汗して風に中れば、肺は腎の母なので、邪は腎氣を傷る。そのため頻尿となり、欠伸が出る。

【銅人】數、頻也。欠、少也、言小便頻而少也。

【意識】「數」は、頻。「欠」は、少。小便は頻尿で尿量は少ないことを言う。

【馬蒔】小便頻數、而發之爲欠。母病及腎。

【意識】小便頻數になり、欠伸が出る。母病が腎に及んだのである。

(『靈樞註証發微』馬注「為小便頻數、而發之爲欠」及腎)。

【多紀元簡】按 氣盛^シ有^リ餘^リ、謂^ヒ肺藏^ノ氣盛^シ而有^ル餘^リ、非^{サル}外感邪氣^ノ之盛^シ也。而^レ云^フ風寒^ノ汗出^テ中風^ニ、則^チ似^ル肺藏^ノ氣盛^シ而有^ル餘^リ者^ニ、必^ス病^ム風寒^ニ汗出^テ中風^ニ、此^レ必理^ノ之所^{ナリ}無^キ。或^{イハ}恐^{ラクハ}六字衍文^カ。諸家順^レ文^ニ詮釋^シ、未^ル曾^テ有^ル疑^ニ及^ハ一者^ハ何^{ソヤ}。又按^ス欠^ハ、呵欠也。宣明五氣篇^ニ云^フ、腎^ハ爲^レ欠^ト。馬註爲^レ是^ト。

【意識】按ずるに、「氣盛んにして余り有り」とは、肺藏の気が盛んで余り有ることを謂う。しかし「風寒し汗出で中風す」（元簡は「風寒」を病証として把えている）と云うのは、肺藏の気が盛んで余り有ると似てはいるが、必ず「風寒し汗出で中風す」を病むかどうかは、必ずとはいえない所である。或いは恐らく「風寒汗出中風」の六字は衍文ではなからうか。諸家は文に順い解釈するだけで、未だ曾て疑おうとしないのは、どうしたことだろう。また按ずるに「欠」は、呵欠（あくび）である。『宣明五氣篇』に「腎は欠を為す」と云う。馬註は正しい。

注①宣明五氣篇第二十三「五氣所病、心爲噫、肺爲欬、肝爲語、脾爲吞、腎爲欠、爲噦。」(S7-8a-09)

【澁江抽齋】按 馬氏肩背痛 風寒、五字爲一句、疑誤。

【意識】按ずるに、馬蒔は「肩背風寒に痛みて」と、五字を一句とするが、誤りではないか。

（『靈樞註証發微』馬注「爲肩背痛於風寒」^{絡脉交手}「爲汗出……」。

氣虛^ス、則^チ肩背痛^{ミテ}寒^ム、少氣^ノ不足^ラ以^テ息^ス、溺色變^ス【一云卒遺矢無變】。

『靈樞』(L5-1b-06)『太素』(P-96-07) 同。

『銅人』、下有卒遺矢無度五字。吳刻本『甲乙經』校注ニ云、一云卒遺矢無變。

【意識】『銅人』は、下に「卒かに遺矢して度無し」の五字が有る。吳刻本『甲乙經』校注に云う「一に云う、卒かに遺矢して変わることを無し」と。

【馬蒔】邪及子。

【意識】病邪が子（の腎）にまで及ぶ。

【張介賓】肩背者、上焦之陽分也。氣虛則陽病。故爲痛爲寒。而怯然少氣、金衰則水涸。故溺色變而黃赤。

【意識】肩背は、上焦の陽分である。氣が虚せば陽が病む。故に痛んで寒える。そして怯えて呼吸が弱々しく金気が衰えれば、子の水氣も涸れる。故に尿の色も黄や赤に変わる。

【楊上善】陽虛陰并故、肩背寒也。大腸脉虛、令膀胱虚熱故、溺色黃赤也。溺、音尿。

【意識】陽が虚せば（そこに）陰が集まる（并）ので、肩背が寒える。大腸の脈が虚せば、（膀胱も虚して）膀胱に虚熱が生じるので、尿の色は黄や赤になる。溺は、音尿。

【張志聰】溺色變者、氣虚而不化也。

【意識】尿の色が変わるのは、氣が虚して濾過する力が無くなるからである。

爲^{スハ}此^ニ諸病^ヲ、

『靈樞』(L5-1b-07)『太素』(P.96-09)同。

【楊上善】手、太陰脈、氣、爲^ス前^ニ諸病^ヲ也。

【意訳】手の太陰脈の気は、前の諸病を発症させる。

凡^ソ十二經^ノ之病、盛^シ則^チ寫^シ之^ヲ、虚^ス則^チ補^シ之^ヲ、熱^ス則^チ疾^ク之^ヲ、寒^ス則^チ留^メ之^ヲ、陷^ス下^ニ則^チ灸^シ之^ヲ、不^レ盛^シ不^レ虚^セ、以^テ經取^ル之^ヲ。

『靈樞』(L5-1b-07)『太素』(P.96-09)

、盛則寫之、虚則補之、熱則疾之、寒

則留之、陷下則灸之、不盛不虚、以經取之。

『澁江抽齋』『甲乙經』、句首有^ニ凡^ソ十二經^ノ之病^ノ六字^一、後文省^ク此^ノ數句^ヲ。

【意訳】略。

『禁服篇』ニ云フ、盛^シ則^チ寫^シ之^ヲ、虚^ス則^チ補^シ之^ヲ。緊痛^ス則^チ取^ル之^ヲ分肉^ニ。代^ス則^チ取^リ血絡^ニ、且^ツ飲^ム藥^ヲ。陷下^ス則^チ灸^ス之^ヲ。不^レ盛^シ不^レ虚^ス、以^テ經取^ル之^ヲ。名^ヲ曰^フ經刺^ト。(L15-2a-08) …又云、陷下^{ナル}者、脉血結^{ホレ}于中^ニ、中^ニ有^リ著血^一、血寒^ト。故^ニ宜^シ灸^ス之^ヲ。(L15-2b-08)

【意訳】『禁服篇』に云う「脈が実証であれば瀉法を用い、虚証であれば補法を用いる。脈が緊で痛みがあれば、分肉に刺鍼する。代脈であれば、血絡に刺絡し、且つ薬を飲ませる。脈が陷下していれば、これに灸をする。実証でも虚証でもないものは、病んでいる蔵の經に取る。これを名付けて經刺と曰う。」と。…また云う「脈が陷下した者は、鬱血が脈内に付着しているので、血が寒えている。故にこれに灸をするとよい」と。

『六十九難』曰、經^ニ言^フ、虚^ス者^ハ補^レ之^ヲ、實^ス者^ハ瀉^レ之^ヲ、不^レ虚^セ不^レ實^セ、以^テ經取^ル之^ヲ、何^ノ謂^フ也。然^リ、虚^ス者^ハ補^レ其^ノ母^ヲ、實^ス者^ハ瀉^レ其^ノ子^ヲ。當^ニ先^ツ補^ル之^ヲ、然後^ニ瀉^ス之^ヲ。不^レ虚^セ不^レ實^セ、以^テ經取^ル之^ヲ者、是^レ正^シ經自^ラ生^ル病^ニ、不^レ中^ニ他^ノ邪^一也。當^ニ自^ラ取^ル其^ノ經^一。故^ニ言^フ以^テ經取^ル之^ヲ。

【意訳】略。

【張介賓】盛^シ寫^シ虚^ス補^ス、雖^モ以^テ鍼^ヲ言^フ、藥^モ亦然^ル也。熱^ス則^チ疾^ク之^ヲ、氣^ニ至^ル速^ク也。寒^ス則^チ留^ム之^ヲ、氣^ニ至^ル遲^ク也。陷下^ス則^チ灸^ス之^ヲ、陽氣内^ニ衰^ハ、脉^レ不^レ起^コ也。不^レ盛^シ不^レ虚^ス、以^テ病^ヲ下^ニ因^ラ氣血^ノ之^レ虚^實、而^レ惟^テ逆^ス於^テ經^一者、則^チ當^ニ隨^ヒ經^ノ所^ニ在^ル、或^ハ飲^ム藥^ヲ、或^ハ刺^ス灸^ヲ以^テ取^ル之^ヲ也。下文諸經^ノ之^レ治^モ、義與^レ此^ノ同^シ。

【意訳】盛んなものは瀉し、虚するものは補すというは、鍼のことを言っているとはいえ、薬もまた同じである。熱がある場合、素早くするのは、氣の至るのが速いからである。寒えた場合、留めるのは、氣の至るのが遅いからである。陷下している場合、灸をするのは、陽氣が内に衰え、脈が取れないからである。不盛不虚は、病因が氣血の虚実ではなく、ただ經氣の逆証のみに因るので、その經氣の在る所に随い、或いは薬を飲み、或いは刺灸をして、これを取り除けばよい。下文の諸經の治法も、意味する所はこれと同じである。

盛^シ者^ハ則^チ寸口大^{ナル}三倍^ニ於^テ人迎^ニ、虚^ス者^ハ則^チ寸口反小^{ナル}於^テ人迎^ニ也。

『靈樞』盛者^ハ寸口大三倍于^ニ人迎^一、虚者^ハ則^チ寸口反小于^ニ人迎^一也。(L5-1b-08)

『太素』同。(P-97-08)

【馬蒔】寸口較、人迎之脉、三倍而躁、則肺經爲實。如終始篇所、謂寫、手、太陰肺、而補、手、陽明大腸者、是也。寸口較、人迎之脉、三倍而小、則肺經爲虛。如終始篇所、謂、補、手、太陰肺、而寫、手、陽明大腸者、是也。

【意訳】寸口が人迎の脈に較べ、三倍で躁の場合は、肺經の実とする。『終始篇』に謂うように、手の太陰肺經を瀉し、手の陽明大腸經を補すのが、これである。寸口が人迎の脈に較べ、三倍より小さい場合は、肺經の虚とする。『終始篇』に謂うよう、手の太陰肺經を補し、手の陽明大腸經を瀉すのが、これである。

注①『終始篇』に謂うように、『終始篇』に肺經の実の治法で、手の太陰肺經を瀉し、手の陽明大腸經を補す、との記載は無いが、以下 a、b、二つの經文から想定は可能。a「脉口三盛・病在足太陰・三盛而躁・在手太陰」(L4-3b-05)・b「脉口三盛・寫足太陰・而補足陽明」(L4-4a-07)

注②『終始篇』に謂うように、「手の太陰肺經を補し、手の陽明大腸經を瀉す」に結びつくものは「人迎三盛・寫足陽明・而補足太陰」(L4-4a-01)であり、馬蒔の寸口が人迎の三倍以内というのは、經旨を逸脱していると思われる。

【張介賓】寸口、主、陰、肺爲、大腸之藏、手、太陰經也。故肺氣盛者、寸口大、三、倍於人迎、虛、則反小也。人迎者、足、陽明之動脈、在、結喉、旁、一寸五分、乃、三陽脉、氣所至也。陰陽別論曰、三陽在、頭、三陰在、手者、其義即此。下同。

【意訳】寸口は陰を主り、肺は大腸の藏であり、手の太陰經である。故に肺氣が盛んだと、寸口は人迎の三倍の強さになり、虚すと反対に小さくなる。人迎は、足の陽明の動脈であり、のど仏の傍ら一寸五分に在り、三陽脈の至る所である。陰陽別論に曰う「三陽は頭に在り、三陰は手に在り」とは、その意味は即ちこのことである。以下同じ。

注①三陽脈の至る所・山下詢『臨床經絡經穴図解』会穴表では胃經人迎穴は足少陽胆と足太陰脾の二經と交会する。しかしここでは人迎脈口診で人迎は陽經を診る処の意。

【多紀元簡】案、何夢瑤『醫編』云、人迎脉、恒大、於兩手寸脉、數倍。從無寸口反大、于人迎者。今驗、之、此、言殆信矣。案、何夢瑤『醫編』云、人迎脉、恒大、於兩手寸脉、數倍。從無寸口反大、于人迎者。今驗、之、此、言殆信矣。

【意訳】案ずるに、何夢瑤『醫編』(卷五・人迎氣口)に云う「人迎脈は、常に両手の寸脈より数倍大きい。従つて寸口が反対に人迎より大きいことは無い」と。今これを驗してみると、ほぼ間違いない。

注①何夢瑤…一六九三〜一七六四年。字は報之。号は西池。広東・南海の人。清代広東の名医。所著『醫編』一書、論、述内科雜病、力陳、用溫補之弊。對張仲景、劉河間、李東垣、朱丹溪諸家之醫理、敘、述詳明、並摻以個人見解、予人以啓發。

大腸手、陽明之脉、起於大指、次指之端、外側、

『靈樞』大腸手陽明之脉、起于大指次指之端、(L5-1b-10)

『太素』大腸手陽明之脉、起於大指次指之端、(P.97-14)

『銅人』次指之端、商陽穴在焉。

【意識】次指の端に、商陽穴が在る。

(『銅人図経』には、「次指之端」の下に「内側」二字あり。)

【滑壽】大指、次指、大指、之次、指、謂、食指也。凡、經脉、之道、陰脉、行、手足、之裏、陽脉、行、手足、之表。此、經起、於大指、次指、之端(商陽)穴、受、手、太陰、之交、行、於陽、之分也。

【意識】大指の次指とは、大指の次の指、食指を謂う。凡そ經脈の通り道は、陰脈は手足の裏(四つん這いになって日があたらない方)を行り、陽脈は手足の表(日のあたる方)を行る。この經は大指の次指の端の商陽穴に起こり、手の太陰の気の交會を受けて、陽分を行る。

【張介賓】手之三陽、從、手走、頭。故、手、陽明、脉、發、於此。凡、後、手、三陽經、皆然。

【意識】手の三陽は、手より頭に走る。故に手の陽明の脈はここに發する。凡そ後の手の三陽經も皆同じである。

循、指、上廉、出、合谷兩骨之間、上入、兩筋之中、

『靈枢』(L5-16-10)『太素』(P.98-01)同。

『銅人』合谷、穴名也。在、此、兩骨之間。兩筋之中、陽谿穴居也。

【意識】合谷とは穴名である。この兩骨(第一中手骨と第二中手骨)の間に在る。兩筋(長母指伸筋と短母指伸筋)の中とは、陽谿が在る処である。

【滑壽】由、是循、指、上廉、歷、二間、三間、以、出、合谷、兩骨之間、復、上入、兩筋之中。

【意識】これより指の上廉を循り、二間、三間を歴て、兩骨の間の合谷に出て、また上つて兩筋の中の陽谿に入る。

【馬蒔】合谷、者、本經穴也。俗名、虎口。

【意識】合谷とは、大腸經の經穴である。俗に虎口と呼ばれる。

【張介賓】上廉、上側也。兩骨、即、大指、次指、後、岐骨、間也。

【意識】上廉とは上側である。兩骨とは、即ち大指と次指の後の岐骨の間である。

循、臂、上廉、入、肘、外廉、

『靈枢』(L5-16-10)『太素』(P.98-02)同。

『銅人』臂之上廉、偏歷之分、手陽明之絡也。肘、外廉、曲池穴、分也。

【意識】臂の上廉とは、偏歷の処であり、手の陽明經の絡穴である。肘の外廉とは、曲池穴の処である。

【滑壽】自、陽谿、而上、循、臂、上廉、之、偏歷、温溜、下廉、上廉、三里、入、肘、外廉、之、曲池。

【意識】陽谿より上つて臂の上廉の偏歷、温溜、下廉、上廉、三里を循り、肘の外廉の曲池に入る。

上循^テ臑^ノ外廉^ヲ、上^リ肩^ニ、

『靈枢』(L5-2a-02)『太素』(P-98-02)上臑外前廉、上肩、

【滑壽】循^リ臑外前廉、歴^テ肘膠^ノ〈五里〉〈臂臑〉、絡^ヒ臑會^ヲ、上^リ肩^ニ至^ル肩^ノ穴^ニ也。臑會、手陽明之絡也。

注①:『十四経發揮』「臑會、見^ユ手少陽經^ニ、手陽明^ノ之絡也。」

【意訳】上腕外側の前廉を循り、肘膠、五里、臂臑を歴て、臑会を絡い、肩に上り肩髃に至る。臑会は手の陽明の絡である。

注①臑会は手の陽明の絡:『鍼灸甲乙経』卷三・十三「臑會、名臑膠。臂前廉、去^ニ肩頭^一三寸、陽明之絡。刺入五分、灸五壯。《氣府論》註云:「手陽明、手少陽結脉之會。」」(K45-12)。「素問」篇第五十九氣府論「肩貞下三寸分間各一」。王注「謂^ニ肩膠、臑會、消灤各二穴^一也。其穴各在^ニ肉分間^一也。……臑會在^ニ臂前廉、肩端同身寸之三寸^一。手陽明少陽二絡氣之會。刺可^レ入^ニ同身寸之五分、灸者可^レ灸^ニ五壯^一」(S15-16a-09)。

出^テ髃^ノ【音偶】骨之前廉^ニ、●

『靈枢』同。(L5-2a-02)

『太素』出髃 前廉 (P-98-02)

【楊上善】髃、音偶、角也。兩肩端高骨、即^チ肩角也。

【意訳】髃、音は偶、角のこと。両肩端の高骨、即ち肩角(肩関節)である。

『銅人』髃骨、謂^フ肩髃之骨^一也。故^ニ肩髃穴^ハ在^リ此^ノ髃骨^ノ之端^ニ。

【意訳】髃骨とは、肩髃の骨を謂う。故に肩髃穴はこの髃骨の端に在る。

【滑壽】肩端兩骨間爲^ス髃骨^一。

【意訳】肩の端の二つの骨(肩甲骨と鎖骨)の間を髃骨とする。

【張介賓】肩端骨罅爲^ス髃骨^一。髃偶同^シ。

【意訳】肩端の骨の隙間を髃骨とする。髃と偶は同じである。

上^テ出^テ柱骨^ノ之會上^ニ、下^テ入^リ缺盆^ニ、

『靈枢』上出于柱骨之會上、下入缺盆。(L5-2a-02)

『太素』上出於柱骨之會上、下入缺盆。(P-98-04)

【楊上善】柱骨、謂^フ缺盆骨上極高處^一也。與^ニ諸脉^一會^シ入^ル缺盆^ニ之處、名^{ツケテ}曰^フ會^ト也。手陽明脉、上^リ至^リ柱骨^ノ之上^ニ、復出^テ柱骨^ノ之下^ニ、入^ル缺盆^ニ也。

【意訳】柱骨とは、欠盆の骨の上の極めて高い処を謂う。諸脈と会し欠盆に入る処を、名付けて会と曰う。手の陽明の脈は、上って柱骨の上に至り、また柱骨の下に出て、欠盆に入る。

『銅人』氣府論注云、「柱骨^ノ之會^ハ、乃^チ天鼎穴也。在^リ頸^ノ缺盆^ノ上、直^リ扶突^ニ、氣舍^ノ後同身寸^ノ之半寸^ニ」也。是^レ也。

【意訳】氣府論の王冰注に「柱骨^ノ之會^トとは、乃ち天鼎穴である。頸の欠盆の上で、扶突の近く、氣舍穴の後、同身寸の五分に在り」と云う。これが柱骨の会である。

注①王冰注:「謂^フ天鼎二穴^一也。在^リ頸^ノ缺盆^ノ上、直^リ扶突^ニ、氣舍^ノ後同身寸^ノ之半^ニ上^ニ。

手陽明、脉氣所發。刺可入同身寸之四分。若灸者，可灸三壯。」
(S15-15b-07)

【滑壽】肩胛上際、會處爲天柱骨。出二髃骨、前廉、循二(巨骨)穴、上出二柱骨、之會上、會於大椎。大椎、手足三陽督脉、之會。

【意識】肩胛部上際の(諸経脈の)会する処は、天柱骨(頸椎)である。髃骨(肩関節)の前廉に出て、巨骨穴を循り、上つて柱骨の会上に出て、大椎穴に会する。大椎は手足三陽と督脈の会穴である。

【楊珣】要旨曰、胛上際、會處爲天(『鍼灸集書』は「三」)。『要旨』も同じ。渋江全善が訂正したのかも知れない。柱骨。此、經自肩髃穴上、出柱骨之上。經曰、胸、兩傍高處爲膺。膺上、横骨爲巨骨。骨上爲缺盆。

注①『要旨』:『素問要旨論』金、劉完素著。

【意識】『素問要旨論』に曰く、「肩胛部の上際の会する処は天柱骨である。この経脈は肩髃穴より上つて、柱骨の上に出る。経文(『要旨論』の経文か?)に(胸の両傍の高い処は膺(前胸部)である。膺上の横骨は巨骨(鎖骨)である。巨骨の上は欠盆である)」と。

(『素問要旨論』卷六・通明形氣篇第七「鳩尾骨爲蔽骨。一名臆。臆上爲胸。胸中兩乳間爲臆中。一名元兒。胸兩傍高處爲膺。膺上横骨爲巨骨。巨骨上爲缺盆。:

肩胛上際會處爲三柱」。/天柱骨、即頸柱骨。又名旋臺骨、玉柱骨、頸骨、大椎骨。即第四、五、六頸椎的合稱。《醫宗金鑑・正骨心法要旨》:旋臺骨、即頭後頸骨三節也。)

【張介賓】肩背之上、頸項之根、爲天柱骨。六陽皆會於督脉之大椎。是爲會上。自大椎而前入足陽明之缺盆。

【意識】肩背の上で、頸項の付け根は頸椎(天柱骨)である。六陽は皆督脈の大椎に会する。これを会上とする。大椎より前にいって足の陽明の欠盆に入る。

【張志聰】缺盆、在結喉兩旁之高骨。形圓而踝、如缺盆然。

【意識】欠盆はのど仏の両傍の高い骨(鎖骨)にある。形は円いくるぶし型でお盆の欠けたような形である。

【多紀元簡】案、氣府論、手陽明、脉氣所發、柱骨之會各一。又氣穴論、大椎、上兩傍各一。柱骨會上、乃大椎、兩傍、必有本經之穴。其名今無攷。銅人註爲天鼎、非也。

【意識】案するに、『氣府論』に「手の陽明の脈氣の発する所、柱骨の会各々」とある。また『氣穴論』に「大椎の上、両傍各々」とある。「柱骨の会上」とは、乃ち大椎の両傍であり、必ず本経の穴が有る(筈である)。その名を今となつては考察しようがない。(しかし)『銅人』の註が天鼎とするのは間違いである。

注①:『素問』氣穴論篇五十八 (S15-7a-08)

【澁江抽齋】按、體雅有詳解、當攷。楊氏會字句、疑非是。

【意識】按ずるに、『體雅』に詳しい解釈が有り、検討すべきである。楊上善の「会」字句の解釈は、疑問である。

絡、肺、下、鬲、屬、大腸。

『靈樞』絡肺、下膈、屬大腸。(L5-2a-02)

『太素』同。(P.98-06)

【楊上善】府氣通藏。故胎藏屬府也。

【意訳】府の気は蔵に通じる。故に蔵を絡い府に所属する。

【滑壽】當天樞之分、會屬於大腸。

【意訳】天樞の処で、会して大腸に所属する。

其支者、從缺盆、直上至頸貫頰、下入齒中、

『靈樞』(L5-2a-03) 『太素』(P.98-06) 其支者、從缺盆、上頸貫頰、入下齒中、

【楊上善】頰、項前也。

【意訳】頰とは、項の前側である。

『銅人』結喉之後曰頰、頰後曰項。頰、謂面傍也。

【意訳】のど仏の後を頰と曰い、頰の後を項と曰う。頰とは顔の両傍を謂う。

【滑壽】頭莖爲頰、耳以下曲處爲頰、口前小者爲齒。其支別者、自缺盆、上行於頰、循天鼎、扶突、上貫於頰、入下齒縫中。

【意訳】頭部の莖のように真つ直ぐな部分を頰といい、耳以下の湾曲部を頰といい、口前の小さいものを齒という。その支脈は、欠盆より上つて頰を行き、天鼎、扶突を循り、上つて頰を貫き、下齒の縫中に入る。

【楊珣】口内前小者爲齒、大者爲牙。

【意訳】口内の前の小さいものを齒とし、大きなものを牙とする。

還出俠口、交人中、左之右、右之左、上俠鼻孔。

『靈樞』還出俠口、交人中、左之右、右之左、上俠鼻孔。(L5-2a-04)

『太素』同。(P.98-07)

『銅人』人中一名水溝、在鼻柱之下。手陽明自此交入足陽明。

【意訳】人中の一名は水溝、鼻柱の下に在る。手の陽明はここより足の陽明に交わり入る。

【滑壽】口唇上、鼻柱下、爲人中。既入齒縫、復出夾、兩口吻、相交、於人中、之分、左脉之右、右脉之左、上挾鼻孔、循禾膠、(迎香)而終、以交於足陽明也。人中穴、爲手陽明督脉之會。

【意訳】口唇の上、鼻柱の下を人中という。ここから齒縫(齒間)に入り、また出て唇の両端を挟み、人中で互いに交わり、左脈は右に之き、右脈は左に之き、上行して鼻孔を挟み、禾膠、迎香を循って終わり、以て足の陽明に交わる。人中穴は、手の陽明と督脈の会穴である。

【楊上善】交、謂相交、不相會入也。

【意訳】「交」とは、互いに交わるが、互いに会入しないことを謂う。

【張介賓】人中、即督脉之水溝穴。由人中而左右互交、上挾鼻孔者、自禾膠以交於迎香穴也。手陽明經止於此。乃自山根交承泣穴而接乎足陽明經也。

【意訳】人中とは、即ち督脈の水溝穴である。人中より左右に互いに交わり、上行して鼻

孔を挟むとは、禾膠より迎香穴に交わることである。手の陽明経はここで終わる。乃ち山根（鼻の付け根）より承泣穴に交わり、足の陽明経に接続するのである。

【汪昂】經別篇又云、循喉嚨。本篇後又云、其別者入耳、合于宗脉。

【意訳】經別篇にまた「喉嚨を循る」と云う。本経脈篇後半でまた「其の別なる者は耳に入り、宗脈に合す」と云う。

注①經別篇…「手、陽明、之正、從手循膺乳、別于肩髃、入柱骨、下走大腸、屬于肺、上循喉嚨、出缺盆、合于陽明也。」(L6-2a-09)

注②本篇後…「手、陽明、之別、名曰偏歷、去腕三寸、別入太陰。其別者、上循臂、乘肩髃、上曲頰偏齒、其別者、入耳、合于宗脉。」(L5-10b-05)

【多紀元簡】老子釋略云、鼻爲天門、口爲地門、天地之間、人中、是也。注①『老子釋略』…明、林兆恩(一五一七〜一五九八)著。

【意訳】『老子釈略』に云う「鼻を天門とし、口を地門とし、天地の間は、人中、これである」。

是動、則病齒痛頤腫。

『靈樞』是動、則病齒痛頤腫。(L5-2a-05)

『太素』是動、則病齒痛頤腫。(P.98-08)

【張介賓】手、陽明、之支者、從缺盆上頸貫頰、入下齒中也。

【意訳】手の陽明の支脈は、欠盆より頸に上り頰を貫き、下齒中に入る。

【多紀元簡】甲乙經、頸作頰。銅人作頤、註云、頤、謂準之秀骨也。並非。

【意訳】『甲乙経』は、「頸」を「頰」に作る。『銅人』は「頤」に作り、註に「頤とは、準の秀でた骨を謂う」と云う。並びに誤りである。

【澁江抽齋】按、正統刊本甲乙經、作頸、不誤。大素作頤、(楊上善)曰、頤、謂面顴、秀高骨也。專劣、反。銅人蓋本於此。

【意訳】按ずるに、正統刊本『甲乙経』は「頸」に作り、誤っていない。『太素』は「頤」に作り、楊上善は「頤とは、顔面の顴のことであり、秀でた高い骨を謂う。專劣の反(セツ)。」と曰う。『銅人』はこれに基づくとと思われる。

是主津液所生病者、

『靈樞』同。(L5-2a-05)

『太素』是主津、所生病者、(P.98-09)

【張介賓】大腸與肺爲表裏。肺主氣、而津液由於氣化。故凡大腸之或泄或祕、皆津液所生病、而主在大腸也。

【意訳】大腸と肺は表裏を為している。肺は氣を主り、津液は氣化に由る。故に凡そ大腸の泄瀉や便秘は、皆津液が生ずる病であり、それらを主るものは大腸に在る。

注①津液は氣化に由る…『靈樞』五癰津液別篇第三十六「水穀皆入于口、其味有

リ五、各注ク其海ニ。津液各走ニ其道。故ニ三焦出シ氣ヲ、以温メ肌肉ヲ、充テ皮膚ヲ、爲ニ其津ト。其流レテ不行者、爲レ液。天暑衣厚キ者、則チ腠理開キ、故ニ汗出。寒留ニ于分肉之間ニ、聚ムルヲ沫則爲レ痛ト。天寒ニハ、則チ腠理閉シ、氣濕（瀋）不行。水下留ニ于膀胱ニ、則爲レ溺與ニ氣。」(L12-1a-07)

【張志聰】大腸傳導水穀、變化精微ニ。故ニ主ニ所生津液、病則津液竭、而火熱盛。故爲ニ目黄、口乾、鼻衄、喉痺、諸證。

【意訳】大腸は水穀を伝導し、精微に変化させる。故に津液を生ずることを主り、大腸が病めば、津液が尽きて、火熱が盛んになる。故に目が黄ばみ、口は乾き、鼻衄や喉痺の諸証を為す。

目黄、口乾、鼻衄、喉痺、

【靈枢】(L5-2a-06)『太素』(P-98-14) 同。

【銅人】注引〈王冰〉曰、鼻中水出、曰鼻、血出、曰衄。〔出、金匱真言論注。〕

【意訳】注が引用する王冰は「鼻中に水が出るのを鼻と曰い、血が出るものを衄と曰う」と曰う。

〔『銅人腧穴鍼灸図経』「……鼻衄、鼻……」〕

注①『素問』篇第四金匱真言論…「冬不、按蹠、春不、鼻衄。」(王冰注)按、謂、按摩、蹠、謂、如、蹠、捷、者、之、舉、動、手足。是、所謂、導引也。然、擾、動、筋骨、則、陽氣不藏、春陽氣上升、重熱、熏肺。肺通於鼻、病、則、形之。故、冬不、按蹠、春不、鼻衄。鼻、謂、鼻中水出、衄、謂、鼻中血出。」(S1-20b-10)

【張介賓】手陽明之別者、合於宗脉。故目黄。

【意訳】手の陽明の別脈は、宗脈に合している。故に目が黄ばむ。

注①宗脉…『靈枢』口問篇第二十八「心者、五藏六府之主也。目者、宗脉之所聚也。上液之道也。口鼻者、氣之門戸也。故悲哀愁憂、則心動、心動、則五藏六府皆搖、搖、則宗脉感、宗脉感、則液道開、液道開、故泣涕出焉。」(L10-7a-07)

【馬蒔】大腸内熱、爲目黄。脉挾口、挾鼻孔。

【意訳】大腸が内熱すると、目が黄ばむ。大腸の脈は口を挟み、鼻孔を挟んでいる。

〔『靈枢註証發微』馬注「由合經爲目黄〔大腸内熱〕、爲口乾〔脉挾口〕爲鼻衄〔脉挾鼻孔〕。〕

【澁江抽齋】按『説文』、鼻、病、寒、鼻塞也。則〈王氏〉所説亦此義。〔楊上善〕注『大素』云、形爲鼻也。有説、鼻是鼻病者、非也。此、説却非是。

【意訳】按ずるに、『説文』に、「鼻、寒を病み鼻塞がる也」とある。即ち王冰の説く所もまたこの意味である。楊上善は『太素』に注して「(鼻の)形を鼻とする。鼻を鼻の病と説く者が有るが、誤りである」と云う。この楊上善の説こそ、誤りである。

肩前、臑痛者、

『靈枢』(L5-2a-06)『太素』(P.98-14) 肩前臑痛、

【馬蒔】脉上、臑肩。

【意訳】脈は上腕と肩に上る。

(『靈枢註証發微』馬注「爲、肩之前臑痛」[臑肩])

大指、次指痛、不用。

『靈枢』(L5-2a-06)『太素』(P.98-14) 同。

【馬蒔】井榮五俞、皆由、次指而上。

【意訳】井榮俞経合の五俞穴は、皆次指より上る。

(『靈枢註証發微』馬注「爲、大指之次指不能舉用」[井榮五俞皆])

【張志聰】肩臑及、大指、之次指、皆大腸經脉所、循之部分。

【意訳】肩と上腕、及び大指の次指は、皆大腸経脈の循る部分である。

氣盛、有餘、則當、脉所、過者、熱腫、

『靈枢』氣、有餘、則當脉所過者熱腫、(L5-2a-06)

『太素』(P.99-01) 同。

【楊上善】是動所生之病、有、盛有、虛。盛者、此脉所、過之處、熱及腫也。

【意訳】是動病、所生病には、盛んなものと虚するものとが有る。盛んなものは、この脈の経過する処が熱し、また腫れる。

【張介賓】當、脉所、過、手、陽明、之次也。

【意訳】この脈の通過する所とは、手の陽明大腸経の場所である。

虚、則寒慄、不復。

『靈枢』(L5-2a-07)『太素』(P.99-01) 同。

【楊上善】陽虚、陰并。故、寒慄也。不復、不得復、於平和也。

【意訳】陽が虚すと、そこに陰が集まってくる。故に寒慄する。「復せず」とは、陰陽の調和を回復できないことである。

【銅人】慄、戰也。陰氣盛、陽氣不足、則爲、寒慄。

【意訳】慄は戦きである。陰氣が盛んで、陽氣が不足すると、寒慄する。

【張介賓】寒慄、不復、易、温也。

【意訳】「寒慄して回復しない」とは、温まりにくいということである。

爲、此、諸病。

『靈枢』(L5-2a-07)『太素』(P.99-02) 同。

【張介賓】此、皆手、陽明、之諸病。

【意訳】これらは、皆手の陽明経の諸病である。

盛者、則人迎大、三倍、於寸口、虚者、則人迎反小、於寸口也。

『靈樞』盛則寫之、虛則補之、熱則疾之、寒則留之、陷下則灸之、不盛不虛、以經取之。盛者 人迎大三倍於寸口、虛者 人迎反小於寸口也。(L5-2a-08)
『太素』盛則寫之、虛則補之、熱則疾之、寒則留之、陷下則灸之、不盛不虛、以經取之。盛者則人迎大三倍於寸口、虛者則人迎反小於寸口也。(P.99-02)
【馬蒔】人迎較、寸口之脉、二倍、而躁、則大腸經爲實。如終始篇所、謂、寫、手、陽明大腸、而補、手、太陰肺、者、是也。人迎較、寸口之脉、三倍、而小、則大腸經爲虛。如終始篇所、謂、寫、手、太陰肺、而補、手、陽明大腸、者、是也。
【意訳】人迎が寸口の脈に較べ、三倍で躁であれば、大腸經の実証である。『終始篇』に謂うように、手の陽明大腸經を瀉して、手の太陰肺經を補す、これである。人迎が寸口の脈に較べ、三倍より小さいときは、大腸經の虚証である。『終始篇』に謂うように、手の太陰肺經を瀉して、手の陽明大腸經を補す、これである。

胃足陽明之脉、起於鼻、交頰中、

『靈樞』胃足陽明之脉、起於鼻之交頰中、(L5-2a-10)

『太素』胃足陽明之脈、起於鼻交頰中、(P.99-05)

【澁江抽齋】『大素』、無、之字。〈李氏〉『知要』、『甲乙經』、『銅人』同。宜、從、刪。王冰注、上古天真論引、本經及、滑壽、十四經發揮、亦無、之字。凡、『發揮』正文與、『銅人』同、者、不、標、下、放、此。

【意訳】『太素』には、「之」字が無い。明・李中梓『内經知要』、『甲乙經』、『銅人』も同じ。削った方がよい。『上古天真論』の王冰注が引く本經、及び滑壽『十四經發揮』もまた「之」字が無い。今後『發揮』の正文が『銅人』と同じ場合、『發揮』は記さない。

【楊上善】頰、阿葛反、鼻莖行也。〔行字疑、衍〕

【意訳】頰は、阿葛の反(アツ)、鼻莖のことである。(行字は衍として削除)

『銅人』兩目之間、鼻拗深處、謂、之、頰中。

【意訳】兩目の間で、鼻の窪みの深い処を、頰中と謂う。

【滑壽】頰、鼻莖也。鼻、山根爲頰。足、陽明、起於鼻、兩旁迎香穴、手、陽明、經穴、由、是而上、左右相、交、於頰中。
(「手、陽明、經穴」、『十四經發揮』になし。澁江全善が補ったものか。)

【意訳】「頰」とは鼻莖である。鼻の山根を「頰」とする。足の陽明經は、鼻の両傍の迎香穴(手の陽明の經穴)に起り、ここより上って、左右から互いに頰中に交わる。

【張介賓】足之三陽、從、頭走、足。故、足、陽明脉、發、於此。凡、後、足、三陽經、皆然。交、頰、其、脉、左右互、交、也。

【意訳】足の三陽は、頭より足に走る。故に足の陽明脈は、ここに發する。凡そ後の足の三陽經は皆そうである。「頰に交わる」とは、その脈が左右から互いに交わることである。

【多紀元簡】張註非、是、頰、鼻莖。出、『說文』。

【意訳】張註は正しくない。「頰」とは、鼻莖である。『說文』に出てくる。(張の何を是に非ずとしているのか?よくわからない。荒川氏答||張介賓は、この脈は交叉すると言っているが、誤りである。/『靈樞』(『類經』)經文は「起於鼻之交頰中」なので、「鼻之

交頰中に起こる」か「鼻に起こり、之きて頰の中に交わる」と読むか。張介賓は、「頰」を「鼻莖也。亦曰山根」という。鼻梁の一番上で交わりと解しているか。）

傍約^ラ大腸^ノ之脉^ヲ、

『靈樞』旁納【原注：一本作^ル約字^ニ】太陽之脉、(LS-2b-01)
『太素』無。

【澁江抽齋】『甲乙經』『千金方』『銅人』、納^ラ作^ル約^ニ。吳刻本『甲乙經』、太陽^ヲ作^ル大腸^ニ。正統刊本不^レ誤^タ。

【意訳】『甲乙經』『千金方』（『備急千金要方』卷第十六（胃腑）胃腑脈論第一）『銅人』は、「納」を「約」に作る。吳刻本（吳勉学「医統正脈本」）『甲乙經』は、「太陽」を「大腸」に作る。正統刊本『甲乙經』は誤たず。

『銅人』足^ノ太陽^ハ、起^コ於^ニ目眥^ニ、而陽明旁^ヲ行^リ於^ニ約^ノ之^ヲ。

【意訳】足の太陽は目眥に起こり、陽明の傍らを行つてこれを束ねる。

【滑壽】過^ク精明^ノ之分[、]手足^ノ太陽少陽足[、]陽明五脉^ノ之會^ヲ。

【意訳】手足の太陽少陽と足の陽明の五脈の会穴である精明穴を過ぎる。

【張介賓】納、入也。足^ノ太陽^ハ起^リ於^ニ目^ノ内眥[、]精明穴^ニ、與^レ頰相近^{ク、}陽明^ハ由^リ此下行^ス。故^ニ入^ル之^ニ也。

【意訳】「納」は入ること。足の太陽は目の内眥の精明穴に起こり、頰の部と近く、陽明はここより下行する。故にこれ（大腸脈）に入るのである。

【多紀元簡】納^ラ作^ル約^ニ爲^リ是。

【意訳】「納」より「約」が正しい。

下^テ循^リ鼻外^ヲ上^テ入^リ齒中^ニ、

『靈樞』(LS-2b-01)『太素』(P-99-05)下循鼻外、入^ル上齒中、

【澁江抽齋】原本入^上作^ル上^入。周本同。今正。趙本兩吳本古抄本、『大素』『銅人』亦作^ル入^上。

【意訳】原本は「入上」を「上入」に作る。周（日校）本も同じ。ここに正す。趙本（趙府居敬堂本）、兩吳（吳悌・吳勉学）本、古抄本、『太素』、『銅人』もまた「入上」に作る。

【滑壽】下^テ循^リ鼻外^ヲ歷^ニ承泣^ノ（四白）巨膠^ヲ、入^ル上齒中^ニ。

【意訳】下つて鼻外を循り、承泣、四白、巨膠を歴て、上齒の中に入る。

還^リ出^テ挾^ミ口^ヲ環^リ唇^ヲ下^テ交^ハ承漿^ニ、

『靈樞』還出挾口、環唇、下交承漿、(LS-2b-02)

『太素』同、(P-99-06)

『銅人』承漿、穴名也。在^リ頤前唇下^ノ宛宛^{タル}中^ニ。

【意訳】承漿は穴名である。下顎の全部、唇の下の窪みの中に在る。

【滑壽】復^リ出^テ循^リ地倉^ヲ、挾^ミ兩口吻^ヲ、環^リ繞^シ唇下^ヲ、左右^{ヨリ}相^ニ交^ル於^ニ承漿^ノ之分^ニ也。承漿、足^ノ陽明任脉^ノ之會^{ナリ}。

(「復」を「復た」と訓まない理由：最初のところ「肺手、太陰、之脉、起於中焦」、
において、滑壽は「還、復也」と言っているから。)

【意訳】(上歯から)戻り出て地倉を循り、両口角を挟み、唇の下を環り繞い、左右より承漿穴の処に交わる。承漿は、足の陽明と任脈の会穴である。

【多紀元簡】劉熙『釋名』云、口下曰承漿。漿、水也。

【意訳】劉熙『積名』に云う「口の下を承漿と曰う。漿とは水である」と。

【参照】『靈樞識』簡案：劉熙『釋名』云、口下曰承漿。承漿、水漿也。
「承漿也今本作漿水也」三字據太平御覽引改。

【意訳】劉熙『積名』に云う「口の下を承漿と曰う。水漿(汗液)を承けるからだ(「承水漿也。今本は漿水也の三字に作る。『太平御覽』収載の引用文によつて改めた)」と。(抄本・木活字本による)

注①劉熙：『釋名』の著者。後漢末、北海(今の山東省)の人。(以同音聲相諧、推論稱名辨物之意。為《爾雅》。《說文》後極有價值之書。)

(wikipedia) 各項目は単語を類似の音の字によつて解釈し(これを声訓と呼ぶ)、その後ろに補足説明を加える、という形式になっている。たとえば釈天篇の「日」と「月」の項目は、
日、実也。光明盛実也。
月、闕也。滿則闕也。

のように、「日(ジツ)」を「実(ジツ、ただし中国語では頭子音が異なる)」で、「月(ゲツ)」を「闕(ケツ)」で解釈している。実際には『說文解字』でもまったく同じ説明をしており、劉熙が必ずしも思いつきで解釈を加えたわけではない。

【澁江抽齋】按、下字、《滑氏》《馬氏》《志聰》屬上句、恐非是。

【意訳】按ずるに、「下」字を、滑壽、馬蒔、張志聡は、上句に属させているが、恐らく間違いである。

【靈樞註証發微】馬注「挾口兩吻地倉環繞唇下左右相交于承漿」。澁江の按語によれば、「口の兩吻地倉を挟み、唇の下を環繞して」と読むことになるが、「唇を環繞して、下つて左右に承漿に相交わる」と読む方が自然ではないか？下文の病証の説明でも「脉循鼻外、俠口環唇」と馬注にはあり、「環唇下」とは言っていない。／『十四經發揮』もおなじ。澁江の根拠がよく判らない。

却循頤後下廉、出大迎、

『靈樞』同、(L5-2b-02)

【太素】卻循頤後下廉、出大迎、(P.99-06)

【滑壽】腮下爲頤、頤中爲頤。

【意訳】腮の下を頤とし、頤の真ん中を頤とする。

【素問要旨論】卷六・通明形氣篇第七：「……頤下為腮。腮下為頤。頤中為頤、一名地閣。頤下為漸、一名下頤。地閣上陷中為承漿。承漿上為口。口内前小者為齒、兩傍大者為牙。牙齒根肉為齦。牙齒間為舌。舌根為舌本。」

『銅人』《大迎》之穴、在曲頤前同身寸之一寸二分、陷者中。

【意識】大迎穴は、顎の角の前方同身寸の一吋二分の窪みの中に在る。

循^リ頰^車、

『靈樞』(L5-26-02)『太素』(P.99-06) 同。

『銅人』頰^車、謂^フ頰^ノ之^ノ牙^車也。言^フ足^ノ陽^明脈、循^テ此^ノ頰^車而行^ク。故^ニ頰^車穴^ハ、在^リ耳^ノ下^ノ曲^ノ頰^ノ之^ノ端^ノ陷^{カナル}中^ニ。

【意識】注に云う「頰車とは、頰の牙車(顎関節)を謂う。足の陽明脈は、この頰車を循つて行くと言う。故に頰車穴は、耳下曲頰の端の窪みの中に在る。

【多紀元簡】『釋名』云、輔^車、其^ノ骨^強、所^ニ以^テ輔^ケ持^ル口^ヲ也。或^{イハ}曰^フ牙^車。牙^ノ所^{ナレハ}載^ル也。或^{イハ}曰^フ領^車。領^ハ、含^ム也。口^ハ含^ム物^ノ之^ノ車^也。或^{イハ}曰^フ頰^車。亦^レ所^ニ以^テ載^ル物^也。或^{イハ}曰^フ車^ノ。謙^鼠之^ノ食^積於^レ頰^ニ、人^ノ食^{スル}似^レ之^ニ。故^ニ取^ル名^也。凡^レ繫^{カハ}於^レ車^ニ、皆^取在^リ下^ニ載^{スル}上^ノ物^也。

【意識】『積名』に云う「輔車は、その骨が強く、口を輔け保つことができる。或いは牙車と曰う。牙を載せるからである。或いは領車と曰う。領は、含むこと。口は物を含む車(台)だからである。或いはまた頰車と曰うのも、物を載せることができるからである。或いは謙車と曰う。謙鼠(もぐら)が食べ物を頰に貯めるのが、人の食するに似ているからである。故に命名された」と。凡て車と関連づけられているのは、皆下に在って上物を載せることに因んでいるからである。

上^リ耳^前、

『靈樞』(L5-26-03)『太素』(P.99-06) 同。

【滑壽】歷^ニ下^ノ關^ヲ。下^ノ關^ハ、在^リ客^{主人}下[、]耳^前動^脈下^廉。合^セ口^ヲ有^リ空[、]開^ク口^ヲ則^チ閉^ス。

【意識】下関を歴る。下関は客主人の下、耳前の動脈の下廉に在る。口を合せば隙間が有り、口を開ければ閉じる処である。

過^キ客^{主人}、

『靈樞』(L5-26-03)『太素』(P.99-06) 同。

【楊上善】客^{主人}、即^チ上^ノ關^穴也。

【意識】客主人とは、即ち上関穴である。

『銅人』客^{主人}、在^リ耳^前起^骨、開^ケ口^ヲ有^リ空^處。

【意識】客主人は、耳前の起骨に在り、口を開ければ隙間の有る処である。(客主人部位に口を開けて出来る隙間は無い。この注、誤りと思われる。しかし『鍼灸甲乙経』にも「上関・一名客主人。在耳前上廉起骨端、開口有孔」とあるのだが、これは聴宮穴ではないか?)

【多紀元簡】按^ス客^{主人}諸^書屬^ス足^ノ少^陽經^ニ。特^ダ外^臺爲^ス本^ノ經^穴、似^レ是^ニ。

【意識】按ずるに、客主人を諸書は足の少陽経に属すとしている。ただ『外台秘要』だけは胃経とするが、これが正しいようだ。

循_リ髮際_ヲ、至_ル額顛_ニ。

『靈枢』(L5-2b-03)『太素』(P.99-07) 同。

【滑壽】額_ノ前_ヲ爲_シ髮際_ト、髮際_ノ前_ヲ爲_ス額顛_ト。…循_リ髮際_ヲ、行_リ懸釐_ノ頤_ノ之分_ヲ、經_ニ〈頭維〉_ヲ、會_ニ於_ニ額顛_ノ之神庭_ニ。客主人、懸釐、頤_ノ頤_ノ三穴、皆手足_ノ少陽陽明_ノ之_ニ交會、神庭穴、足_ノ太陽陽明督脈_ノ之_ニ會。

【意訳】額会穴のある(冠状縫合)部の前を髮際と為し、髮際の前を額顛と為す。…髮際を循り、懸釐、頤_ノ頤_ノの分を行り、頭維を経て、額顛の神庭に会する。客主人、懸釐、頤_ノ頤_ノの三穴は、みな手と足の少陽と陽明の交会穴であり、神庭は、足の太陽、陽明と督脈の交会穴である。

(額_ニ 凶_ニ 凶_ニ (ひよひよと動く意_ニ 幼児の頭蓋骨がまだ完全に縫合し終わらないとき、呼吸のたびに動いて見える前頭〈大泉門部〉及び後頭の一部〈小泉門部〉)

其_ノ支_{ナル}者_ハ、

『靈枢』(L5-2b-03)『太素』(P.99-07) 同。

【汪昂】按_{スルニ}、此_レ乃_チ正_{ナリ}經_{ナリ}。何_ヲ以_テ反_テ屬_{セシムルヤ}支_ニ脈_ニ。

【意訳】按ずるに、これは正経である。何を以て反対に支脈とするのであろうか。

從_リ大迎_ノ前_ニ下_リ人迎_ニ、

『靈枢』(L5-2b-03)『太素』(P.99-07) 同。

『銅人』人迎_ハ、在_リ結喉_ノ兩傍_ニ、大脉動_ノ應_ス手_ニ、是也。

【意訳】人迎は、結喉(のど仏)の両傍に在り、強い脈動が手に感じられる処である。

循_リ喉嚨_ヲ入_リ缺盆_ニ、

『靈枢』(L5-2b-04)『太素』(P.99-07) 同。

【滑壽】循_リ喉嚨_ヲ、歷_ニ〈水突〉〈氣舍〉_ヲ、入_ニ〈缺盆〉_ニ。缺盆_ハ、在_リ肩下横骨_ノ陷中_ニ。

【意訳】喉嚨を循り、水突、氣舍を歴て、欠盆に入る。欠盆は、肩下横骨(鎖骨)の陷中に在る。

【張介賓】缺盆_ハ、本_ノ經_ノ穴也。

【意訳】欠盆は、本経の経穴である。

【多紀元簡】按_{スルニ}、憂_ヒ患_ニ無_シ言_ハ篇_ニ云_フ、咽_ノ喉_ノ者_ハ、水_ノ穀_ノ之道_也、喉_ノ嚨_ノ者_ハ、氣_ノ之所_ニ以_テ上下_{スル}者也_ト。

【意訳】按ずるに、『靈枢』憂_ヒ患_ニ無_シ言_ハ篇_ニ第六十九 (L19-8a-07) に、「咽_ノ喉_ノは、水_ノ穀_ノの道であり、喉_ノ嚨_ノは、氣_ノの上下する処である」と云う。

下_リ膈_ニ、

『靈枢』下_リ膈_ニ (L5-2b-04)

『太素』同。(P.99-07)

【滑壽】行_リ足_ノ少_ノ陰_ノ俞_ノ府_ノ之外_ヲ、下_リ膈_ニ。

【意識】足の少陰経の兪府穴の外を行り、横隔膜に下る。

屬_レ胃_ニ絡_フ脾_ヲ。

『靈樞』(L5-2b-04)『太素』(P.99-07) 同。

【滑壽】當_ニ上腕中腕_ノ之分_ニ、屬_シ胃_ニ絡_フ脾_ヲ。上腕_ハ、足_ノ陽明手_ノ太陽任脉_ノ之會_ニ。中腕_ハ、手_ノ太陽少陽足_ノ陽明_ノ所_レ生_{スル}任脉_ノ之會_ニ。

【意識】上腕、中腕の処で、胃に属し脾を絡う。上腕は、足の陽明と、手の太陽と、任脈との交会穴である。中腕は、手の太陽と、手の少陽と、足の陽明の生ずる処と、任脈との交会穴である。

【張介賓】屬_ス胃_ト、謂_フ本經_ノ之所_ヲ屬_ス也。絡_{フト}脾_ヲ、胃_ト與_ハ脾_ヲ爲_ニ表裏_一也。

【意識】「胃に属す」とは、本経が属する所を謂う。「脾を絡う」とは、胃と脾とが表裏を為すということである。

其_ノ直_{ナル}者_ハ、

『靈樞』(L5-2b-04)『太素』(P.99-012) 同。

【張介賓】直_{ナル}者_ハ、直_チ下_テ而_テ外_ヲ行_ル也。

【意識】「直なる者」とは、直ちに下つて外を行るものことである。

從_ニ缺盆_一、下_リ乳_ノ内廉_ニ、下_テ俠_ミ臍_ヲ、入_ル氣街_ノ中_ニ。

『靈樞』從_ニ缺盆_一、下_リ乳_ノ内廉_ニ、下_テ俠_ミ臍_ヲ、入_ル氣街_ノ中_ニ。(L5-2b-05)

『太素』同。(P.99-012)

『銅人』、街_ヲ作_ル衝_ト。

【意識】『銅人』は、「街」を「衝」に作る。

【滑壽】直_{スル}者_ハ、從_リ缺盆_一而_テ下_リ乳_ノ内廉_ニ、循_ニ氣戸_ノ、庫房_ノ、屋翳_ノ、膺窻_ノ、乳中_ノ、窻_ノ、乳中_ノ、乳根_ノ、不容_ノ、承滿_ノ、梁門_ノ、關門_ノ、太乙_ノ、滑肉門_ノ、下_テ俠_ミ臍_ヲ、歷_テ天樞_ノ、外陵_ノ、大巨_ノ、水道_ノ、歸來_ノ、諸穴_一、而入_ル氣街_ノ中_ニ也。氣街_一、一名_ニ氣衝_ト。

注①而下_リ・而下_リ而下_リより下。形而上の「而」

【意識】直行する経脈は、欠盆より下、乳の内廉を下り、氣戸、庫房、屋翳、膺窻、乳中、乳根、不容、承滿、梁門、關門、太乙、滑肉門を循り、下つて臍を挟み、天樞、外陵、大巨、水道、歸來の諸穴を歴て、氣街の中に入る。氣街は、一つに氣衝と名づける。

『銅人』氣衝_ハ、穴名也。在_リ股下_ノ俠_ミ兩傍_一、相去_ル同身寸_ノ之四寸_ノ鼠鼯上_ニ。或_{イハ}云_フ、在_リ毛際_ノ兩傍_ノ鼠鼯上_ニ、乃_チ三焦_ノ之道路_{ナリ}。故_ニ云_フ、氣衝_ト。或_{イハ}云_フ、在_リ同身寸_ノ之一寸_ニ。

（『素問』篇第三十二刺熱論・王注：「氣街在_リ腹齊下横骨兩端鼠鼯上、同身寸之一寸_ニ、動應_レ手_ニ」。S9-7a-01）

【意識】氣衝は穴名である。股下の両傍を挟み、相去ること同身寸の四寸の鼠鼯上に在る。或いは、毛際兩傍の鼠鼯上に在る。乃ち三焦の道路である。故に氣衝、と云う。或いは、歸來の下同身寸の一寸に在ると云う。

【汪昂】衛氣篇云、胸氣有街、腹氣有街、頭氣有街、脛氣有街。街猶路也。

【意訳】『靈樞』衛氣篇第五十一(L16-2a-06)に「胸氣に街が有り、腹氣に街が有り、頭氣に街が有り、脛氣に街が有る」と云う。街は、路に同じである。

其支者、起于胃口、

『靈樞』(L5-2b-05) 同。

『太素』其支者起于胃口下 (P.99-013) (注：『蕭本』『左合本』ともに、楊注が胃下口となっており、経文の胃口下は誤りとする)

『銅人』、作起胃口。

【意訳】『銅人』は「胃の下口に起る」に作る。

『楊上善』胃傳、食入小腸一處、名胃下口。

【意訳】胃から食を伝えて小腸に入る処を、胃の下口と名づける。

『銅人』胃下口、即小腸上口也。此處名幽門。

【意訳】胃の下口とは、即ち小腸の上口である。ここを幽門と名づける。

【滑壽】胃下口、下脘之分。難經云、太倉下口爲幽門者、是也。自屬胃處、起胃下口。

【意訳】胃の下口とは、下脘の処である。『難經』四十四難に「太倉の下口を幽門と為す」と云うのがこれである。胃に属する処から、胃の下口に起る。

下循腹裏、

『靈樞』同。(L5-2b-06)

『太素』循腹裏 (P.99-013)

『銅人』、無下字。

【意訳】『銅人』に、「下」字は無い。

下至氣衝中而合、

『靈樞』(L5-2b-06) 『太素』(P.99-013) 同。

【滑壽】過足、少陰盲俞之外本經之裏、下至氣衝中、與前之入氣衝者上合。

【意訳】足の少陰経の盲俞の外を本経の裏を過ぎり、下つて氣衝の中に至り、先に氣衝に入つたものと合する。

以下脾關、

『靈樞』同。(L5-2b-06)

『大素』以下脾、(P.99-013)

【史崧】脾、音筆。

【意訳】脾、音は筆(ヒ)。

抵^リ伏兔^ニ、下^テ入^リ膝^ノ臑^ノ中^ニ、

『靈樞』抵伏兔、下^レ膝臑中、(L5-2b-06)

『太素』抵伏兔、下^レ膝入臑中、(P.99-013)

【楊上善】抵、至也。丁禮反。膝、脛頭也。臑、膝之端骨也。頻忍反。

【意訳】「抵」は、至るである。丁礼の反(テイ)。「膝」は、脛頭である。「臑」は、膝の端の骨である。頻忍の反(ヒン)。

『銅人』伏兔穴、在^リ膝上同身寸之六寸^ニ。臑、謂^フ膝之蓋骨^也。

【意訳】伏兔穴は、膝上同身寸の六寸に在る。「臑」は、膝蓋骨を謂う。

【滑壽】股外爲^シ髀^ト、髀前膝上起肉處爲^ス伏兔^ト。伏兔後交文爲^ス髀關^ト。挾^ム膝解^ノ中^ヲ爲^ス臑^ト。既^ニ相^ニ合^シ氣衝^ノ中^ニ、乃^チ下^リ髀關^ニ、抵^リ伏兔^ニ、歷^テ

二(陰市)〈梁丘〉、下^テ入^リ膝臑中^ニ、經^ニ臑鼻^ト。

【意訳】股の外側を髀とし、髀の前で膝の上の起肉(大腿直筋)の処を伏兔とする。伏兔の後の交文(鼠径部横紋の尽きる処)を髀関とする。膝解の中を挟むものを臑とする。既に気衝の中で互いに合した後、髀関に下り、伏兔に至り、陰市、梁丘を歴て、下つて膝臑の中に入り、臑鼻を経る。

注①膝解：『素問』篇第六十骨空論「膝解爲^リ骸關。」(S16-4a-10)。立之注「案^{スルニ}、「骸關」諸説粉紛^ト不^レ一定^セ、今斷^ス爲^ス膝眼穴^ト。」

下^テ循^リ外廉^ヲ、下^リ足跗^ニ、入^ル中指^ノ内間^ニ。

『靈樞』下循脛外廉、下足跗、入中指内間。(L5-2b-07)

『太素』同。(P.100-03)

【楊上善】脛、故孟反。

【意訳】脛、故孟の反(コウ)。

『銅人』脛外廉、三里穴分也。跗、謂^フ足上^也。衝陽穴^{在^リ焉}。

【意訳】脛の外廉とは、三里穴の処である。跗とは、足上(足の甲)を謂う。衝陽穴はここに在る。

【滑壽】脛骨爲^ス脛^ト。跗、足面也。下循^リ外廉^ノ之^ニ三里^ノ、入^リ巨虚上廉^ノ、入^リ條口^ノ、入^リ巨虚下廉^ノ、入^リ解谿^ノ、下^リ足跗^ノ之^ニ衝陽^ノ、入^リ陷谷^ノ、入^リ中指外間^ノ之^ニ内庭^ノ、至^テ厲兌^ノ而終^ル也。

【意訳】脛骨は脛である。跗は、足面(足のおもて、足の甲)である。下つて脛の外廉の三里、巨虚上廉、条口、巨虚下廉、解谿、解谿を循り、足跗(足背・足の甲)の衝陽、陷谷を下り、中指の外間の内庭に入り、厲兌に至って終わる。

【張介賓】足陽明經止^ニ於此^ニ。

【意訳】足の陽明経はここに終わる。

【多紀元簡】(滑氏)〈馬氏〉、内間作^ル外間^ニ、非^{ナリ}。

【意訳】滑壽、馬蒔が、内間を外間に作るのは、間違い。

其^ノ支^ナ者^ハ、下^ル膝^ノ三寸^ニ而別^レ以下^テ入^ル中指^ノ外間^ニ。

『靈樞』其支者、下廉三寸而別^レ下入中指外間。(L5-2b-07)

『太素』同。(P.100-04)

【滑壽】此支、自膝下三寸、循三里穴之外、別行而下入中指、外間、與前之内庭厲兌合也。

【意訳】この支脈は膝下三寸より三里穴の外を循り、別行して下り、中指(第三趾)の外側に入り、先の内庭、厲兌と合する。

【張介賓】廉、上廉也。下廉三寸、即豐隆穴、是爲陽明別絡。

【意訳】廉とは、上廉穴である。上廉を下ること三寸は、即ち豐隆穴であり、これは陽明胃經の絡穴である。

【馬蒔】其絡脉之支別者、自膝下三寸、循三里穴之外、別下、歷上廉條口下廉豐隆解谿衝陽陷谷、以至内庭厲兌而合也。

【意訳】その絡脈の支別は、膝下三寸の位置から、三里穴の外を循り、別れて下り、上廉、条口、下廉、豐隆、解谿、衝陽、陷谷を歴て、内庭、厲兌に至って合する。

【多紀元簡】(馬氏)志聰、以廉等六穴爲支別所屬者誤。

【意訳】馬蒔、張志聰が、上廉等六穴を支別所屬とするのは誤りである。

其支者、別附上、入大指間、出其端。

『靈樞』(L5-2b-08)『太素』(P.100-05)同。

【楊上善】脉從氣街下行至足指間、凡有三道。

【意訳】胃脈が氣街より下行して足指の間に至るには、全部で三つの経路が有る。

『銅人』大指次指之端也。厲兌所居焉。素問云、陽明根、起於厲兌。足陽明、自此交入足太陰。

【意訳】大指の次指の端である。厲兌がある。『素問』に「陽明の根は、厲兌に起る」と云う。足の陽明は、ここから足の太陰に交わり入る。

注①『素問』陰陽離合論篇第六「太陰之前、名曰陽明。陽明根、起於厲兌。名曰陰中之陽。」(S2-12a-01)

【滑壽】此支、自附上衝陽穴、別行入大指間、斜出足厥陰行間穴之外、循大指下、出其端、以交於足太陰。

【意訳】この支脈は足背の衝陽穴から、別行して大指の間に入り、斜めに足の厥陰行間穴の外に出て、大指の下を循り、その端に出て、足の太陰と交わる。

【汪昂】按凡交經授受、皆屬支脉。經別篇又云、上通于心、循咽、出口、上頰頤、還繫目系。

【意訳】按ずるに、凡そ経が接して(氣を)授受するのは、皆支脈に属する。『經別篇』もまた「上つて心に通じ、咽を循り、口に出て、鼻筋(頰)から頰骨(頤)の辺りに上り、還つて目系に繋がる」と云う。

注①經別篇・『靈樞』篇第十一「足陽明之(別行)正、上至脾、入于腹裏、屬胃、散之脾、上通于心、上循咽、出于口、上頰頤、還繫目系、合于陽明也。」(L6-2b-01)

注②『現代語訳靈樞』上卷二六二頁の注：正・別―「正」は正經のこと。「別」は分岐したものの。經別は十二經脈の循行経路から外れて分岐した部分で、本經の循行経路とは異なる

るが、それでも正経に属していて支絡ではない。(汪昂の注釈は経別を支脈と言っているようだ。)

是動^レ、則病^チ凄凄然^ト、振寒^シ、

『靈樞』(L5-2b-09)『太素』(P.100-06) 是動、則病洒洒^ニ 振寒。

【澁江抽齋】『銅人』作^ル「凄凄然」。

【意訳】『銅人』は凄凄然に作る。

『素問』脉解篇云、陽明所謂洒洒^ニ 振寒^ト者、陽明者午也。五月盛陽^ノ之^レ陰^ニ也。陽盛^ニ而陰氣加^レ之^ニ。故洒洒^ト 振寒^{スル}也。(S13-10b-10)

【意訳】『素問』篇第四十九脉解篇(S13-10b-10)に云う「陽明の病症の、ゾクゾクと悪寒がして震えるというものがある。これは陽明が十二支では午であり、月では五月に当たる。五月は盛陽で、陽極まって陰が生じるときである。つまり陽が盛んでこれに陰気が加わるので、ゾクゾクと悪寒がして震えるのである」と。

【楊上善】洒洒^ト、惡寒^ノ兒。音洗。謂^フ如^キ灑洗^ト寒^ニ也。

【意訳】洒洒とは、悪寒している様子。音は洗(センは慣用音。正しくは、セイかサイ)。水を注がれたように寒えることを謂う。

『銅人』凄凄然^ト、不^レ樂^マ之兒。寒氣客^ス於^ニ經^ニ、則陰氣盛^ニ、陽氣虛^ス。故爲^ニ振寒^ト。

【意訳】凄凄然とは楽しくない(思い通りにならない)様子。寒気が経脈に侵入すると、陰気が盛んになって、陽気は虚すので振寒するのである。

【張介賓】土病^ニ而洒洒^ト 振寒^{スル}者、風^ノ之勝^也也。

【意訳】土が病んで洒洒と振寒するのは、風気が勝ったのである(木剋土)。

【李中梓】振寒^{スル}者、肝風勝^ツ也。

【意訳】振寒するのは、肝風が勝ったのである。

【多紀元簡】馬氏引^ク「瘧論^ニ陽明虛^ニ 則寒慄鼓頷^ト、恐^ラ非^{ナリ}」。

【意訳】馬蒔が『瘧論』の「陽明が虚すと寒さに震え、顎がガクガクする」を引用して傍証とするのは、恐らく正しくない。

注①『素問』瘧論篇第三十五「黄帝問曰、夫瘧瘧^ハ、皆生^ス於^ニ風^ニ。其^ノ蓄作^ニ有時者、何^也也。岐伯對曰、瘧之始^ニ發^{スル}也、先起^ニ於^ニ毫毛^ニ、伸欠^乃作^{コリ}、寒慄^鼓頷^シ、腰脊俱痛^ム。寒去^ニ則^レ内外皆熱^シ、頭痛^ム如^ク破^ル、渴^欲冷飲^ヲ。帝曰、何^ノ氣使^レ然^ラ。願^ク聞^ク其^ノ道^ヲ。岐伯曰、陰陽上下交^々爭^ニ、虛實更作^{コリ}、陰陽相移^ル也。陽并^ニ於^ニ陰^ニ、則陰實^ニ而陽虛^ス。陽明虛^ス、則寒慄鼓頷^{スル}也。」(S10-01a-6)

善伸^ク數欠^シ、

『靈樞』善呻^ク數欠^シ、(L5-2b-09)

『太素』同。(P.100-07)

【澁江抽齋】『太素』、呻^ヲ作^ル伸^ニ。『甲乙經』『銅人』同。宜^シ從^ヒ改^ム。

【意訳】『太素』は「呻」を「伸」に作る。『甲乙經』『銅人』も同じ。これに従い改める

べきである。

【楊上善】凡^ソ欠^シ及^ヒ多^キ伸^{ヒス}、或^イ爲^レ陽上^リ陰下^リ。人之將^ニ臥^{サント}、陰陽上下^ニ相引^キ、故^ニ數^タ欠^ス。

【意訳】一般にあくびが出てやたらと伸びをするのは、たいがい陽気が上り陰気が下っている場合である。人が寝ようとすると、陰陽は上下に引き合うので、しばしばあくびが出る。

『銅人』伸^{トハ}、謂^フ伸^{ハシ}、努^ム筋骨^ヲ也。

【意訳】伸とは、筋骨を努めて伸ばすことを謂う。

【張介賓】善^ク呻^シ數^タ欠^ス、胃^ノ之^ノ鬱^也也。

【意訳】「よく呻きしばしばあくびをする」のは、胃の気が塞がっているのである。

【張志聰】善^ク呻^{スル}者^ハ、陽氣鬱^レ而欲^シ伸^{ハシ}出^タ之^ヲ、數^タ欠^{スル}者^ハ、陽欲^{スレハ}引^{キテ}而上^{ケント}也。

【意訳】「よく呻く」のは、陽気が塞がっているので、これを伸ばして出そうとするからであり、「しばしばあくびをする」のは、陽気を引き上げようとするからである。

顔黒^ツ、

『靈樞』(L5-2b-09)『太素』(P:100-07) 同。

【楊上善】顔^{トハ}、額^陽也。黒^ハ、陰色^{ナリ}。陰氣見^{ハル}、額^ニ、陽病^ム也。

【意訳】「顔」とは、額であり、陽(の部)である。黒は、陰の色。陰気が額に現れるのは、陽が病んでいるからである。

『銅人』顔^{トハ}、額^也也。

【意訳】顔とは額である。

【張介賓】黒^ハ、水^ノ色^也。土病^ム、則^チ水無^ク所^レ畏^ル、故^ニ黒色反^テ見^{ハル}於^ニ顔面^ニ。

【意訳】黒は水の色である。土が病むと水は畏れることが無くなり、反って黒色が顔面に現われる。

病至^ル、則^チ惡^ミ人^ト與^ラ火^ヲ、聞^ク木音^ヲ、則^チ惕然^ト驚^キ、心欲^シ動^{カント}、

『靈樞』病至^ル則^チ惡^ミ人^ト與^ラ火^ヲ、聞^ク木音^ヲ、則^チ惕然^ト驚^キ、心欲^シ動^{カント}、

『太素』同。(P:100-08)

【澁江抽齋】『大素』、聲^ヲ作^ル音^ニ。『甲乙經』『銅人』同。『銅人』、欲^シ字在^リ次句獨字^ニ上^ニ。

【意訳】『太素』は「聲」を「音」に作る。『甲乙經』『銅人』も同じ。『銅人』は「欲」字が、次句「獨」字の上に在る。

【楊上善】至[、]甚^也也。

【意訳】「至」は、甚し(い)なり。

【馬蒔】素問陽明脉解篇^ニ云、陽明^ハ主^リ肉^ヲ、其^ノ脉血氣盛^{ニシテ}、邪客^{スル}之^ニ則^チ熱^シ、熱^甚、則^チ惡^ム火^ヲ。(S08-16b-05)。又云、陽明^ハ厥^ニ、則^チ喘^ム而^{シテ}惋^ム、惋^ム、則^チ惡^ム人^ト。(S08-16b-07)。又云、胃^ハ者土^也也。故^ニ聞^ク木音^ヲ而^{シテ}驚^ク者^ハ、土惡^ム木^也。(S08-16b-04)。又脉解篇云、所謂甚^{ニシテ}、則^チ(厥^ニ)、馬蒔『靈樞發微』にはない。補^フ惡^ム人^ト與^ラ火^ヲ、

聞^{クワ}ニ木音^ヲ一則^チ惕然^ト而驚^ク者、陽氣^ト與^ニ陰氣^ト相薄^リ、水火相惡^ム故^ニ、惕然^ト而驚^ク也^ト (S13-1a-09)。

【意訳】『素問』陽明脉解篇第三十に云う「陽明は肉を主り、その脈の血気は盛んで、邪気が侵入すると発熱し、熱が甚しいときは火を嫌う」と。また云う「陽明が厥逆すると、呼吸が促進して悶え、悶えると人と接するのを嫌うようになると。また云う「胃は土である。故に木のざわめきを聞いて驚くのは、土が木を嫌うからである」と。また『素問』脉解篇第四十九に云う「所謂甚しいときには（厥逆して）人と火とを嫌い、木のざわめきを聞くたびつくりして驚くのは、陽気と陰気がせめぎ合い、水火が悪み合うので、びつくりして驚くのである」と。

『銅人』心動^{クト}、心不^ル安^セ也。

【意訳】心が動じるとは、心が安らかでないことである。『銅人腧穴鍼灸図経』には「心欲動」の「欲」字なし。

【張志聰】胃^ノ絡^ノ上^テ通^ニ于心^ニ。故^ニ心欲^{スル}動^{カント}也。

【意訳】胃の絡脈は上って心に通じている。故に心は動揺したがる。

獨閉^リ戸塞^レ牖^ヲ而處^ル。

『靈枢』獨閉^リ戸塞^レ牖^ヲ而處^ル。(L5-2b-10)

『太素』獨閉^リ戸牖^ヲ而處^ル。(P.100-10)

【澁江抽齋】『銅人』無^シ塞^シ字^一。

【意訳】『銅人』は「塞」字が無い。

【楊上善】陰^ハ靜^ニ而闇^ク、陽^ハ動^ニ而明^シ。今陰氣加^フ陽^ニ。故^ニ欲^{スル}閉^レ戸^ヲ獨^リ處^{ラント}也。

【意訳】陰は静で闇く、陽は動で明るい。今陰気が陽に加わるので、戸を閉め独りで居たくなる。

【馬蒔】脉解篇^ニ云^フ、所謂欲^{スル}獨^リ閉^メ戸^ヲ牖^ヲ而處^{ラント}者^ハ、陰陽相薄^レ也。陽盡^{キテ}而陰盛^{シテ}。故^ニ欲^{スル}獨^リ閉^メ戸^ヲ牖^ヲ而處^{ラント}也。(S13-11b-01)。

【意訳】『素問』脉解篇第四十九に云う「所謂独り戸牖を閉めて処らんと欲する」のは、陰陽の気がせめぎ合い、陽気が尽きて陰気が盛んになるため、戸や窓を閉めて一人で居たくなるのである」と。

『銅人』處^ル、居^ル也。以其^テ惡^ム喧^ハ爾[。]

【意訳】「処」は居ること。ただその喧しさを嫌うのである。

【李中梓】欲^{スル}獨^リ閉^シ戸^ヲ者^ハ、火動^{スル}則^チ畏^ル光明^ト也。

【意訳】「独り戸を閉じんと欲する」のは、火が動ずると明るさを畏れるからである。

甚^{シク}則^チ欲^シ上^リ高^キ而歌^ヒ、棄^ス衣^ヲ而走^{ラント}、

『靈枢』甚^{シク}則^チ欲^シ上^リ高^キ而歌^ヒ、棄^ス衣^ヲ而走^{ラント}。(L5-3a-01)

『太素』同。(P.100-11)

【脉解篇】云^フ、所謂病至^ル則^チ欲^ス乘^リ高^キ而歌^ヒ、棄^ス衣^ヲ而走^{ラント}者^ハ、陰陽復^タ爭^ヒ而外^ニ并^ス於^ニ陽^ニ。故^ニ使^ム之^ヲ棄^テ衣^ヲ而走^{ラント}也。(S13-11b-03)。

【意識】『素問』脉解篇第四十九に云う「所謂病が重くなると高い処に乗って歌い、衣服を脱ぎ捨て走り出したがるのは、陰陽が重ねて相い争い、邪気が外の陽経に合するので、衣服を脱ぎ捨て走り出したがるのである」と。

『銅人』甚^{シト}、謂^フ盛^{シナル}也。歌^フ者、以^テ陽^ハ主^ル喜^{ヒラ}故^ニ、其^ノ聲^爲歌^ト耳。以^テ陽^ハ主^ル動^ル故^ニ、走^レ也。

【意識】「甚しい」とは、盛んなことを謂う。「歌う」のは、陽は喜びを主るので、その声が歌になるのである。また陽は動を主るので、走るのである。

【馬蒔】陽明脉解篇、岐伯曰、四支^ハ者、諸陽^ノ之本也。陽盛^シ則^チ四支^實、實^{スル}則^チ能^ク登^ル高^キ也 (S08-19a-02)。…熱盛^{シナル}于^ニ身^ニ故^ニ、棄^テ衣^ヲ而^テ走^ル也 (S08-19a-05)。

【意識】『陽明脉解篇』に岐伯は曰う「四支は諸陽の根本だから、陽が盛んになると四支は実し、実すれば高い処に登る」とができる (S08-19a-02)。…身熱が盛んになるから、衣服を脱ぎ捨て、走ろうとする (S08-19a-05)」と。

賁響腹脹。

『靈枢』同。(L5-3a-01)

『太素』賁響腹脹。(P.100-11)

【楊上善】嚮、音^ハ郷。謂^フ陽氣賁聚^シ虚滿^爲腹脹^一也。

【意識】嚮、音は郷(キョウ)。陽氣が賁(は)り集まり虚満して腹が脹ることを謂う。(嚮、むかう。賁嚮で走り向かうの意。)荒川氏・楊上善は「賁」をほとんどのところで「膈」と解しているように思われる。そうであれば、ここは「横隔膜にあつまり、虚満して」の意か。

【張志聰】陽明^ノ之脉^ハ、下^リ膈^ニ屬^シ胃^ニ絡^フ脾^ヲ。故^ニ賁響^ハ腹脹^ス。

【意識】陽明の脈は、横隔膜に下り、胃に属し脾を絡う。故に腹が脹満する。

【澁江抽齋】按^{スル}、賁響^ハ脹満^ノ兒^ト。詳^シ于^ニ壽夭剛柔篇^ニ。(張氏)以^テ腸胃^ノ雷鳴^一注^{スル}之^ニ、誤^リ。

【意識】按ずるに、賁響は脹満した様子。『靈枢』寿夭剛柔篇第六に詳しく解釈してある。張介賓が腸胃の雷鳴と注するのは、誤り。

注①解釈・按^{スル}、賁響^ハ、與^ニ膨亨^一同^{シク}、謂^フ腹満^一也。賁響腹脹、是^ヲ爲^ス肝厥^ト。『病源論』腹脹候、關脉實^{ナル}、即^チ腹満嚮^ト。『千金翼』温脾丸條、氣嚮腹満。並^ニ可^ク以^テ證^ス。(膨亨=膨脹…はらがふくれる。腹満嚮…腹満鼓之有聲。)

【参照】『靈枢』篇第六壽夭剛柔…「黄帝曰、刺^ニ有^ニ三變^一者奈何。伯高荅曰、有^ニ刺^ス營者^一。有^ニ刺^ス衛者^一。有^ニ下^リ刺^ス寒痺^ノ之留^ル經^ニ者^一。黄帝曰、刺^ニ三變^一者奈何。伯高荅曰、刺^ス營者^一出^シ血[、]刺^ス衛者^一出^シ氣[、]刺^ス寒痺者^一内^レ熱。黄帝曰、營衛寒痺^ノ之爲^レ病^ナ奈何。伯高荅曰、營^ノ之生^{スル}病^也、寒熱少氣[、]血上下行^{。衛^ノ之生^{スル}病^也、氣痛^{時^ニ來^ニ時^ニ去[、]佛^ハ儼^ハ賁響[、]風寒客^ニ于腸胃^ノ之中^{。寒痺^ノ之爲^レ病^也、留^レ而^レ不^レ去[、]時^ニ痛[、]而^レ皮^不仁^{。黄帝曰、刺^ニ寒痺^一内^レ熱^{奈何}。伯高荅曰、刺^ニ布衣^一者^一以^テ火^燂之[、]刺^ニ大人^一者^一以^テ藥^熨之^{。』(L3-6a-1)}}}}}

是爲^ス臂^ニ【一作^ル肝^ニ】厥^ト。

『靈樞』是爲^ル肝厥。 (L5-3a-01)

『太素』是爲^ル筋厥。 (P.100-11)

【澁江抽齋】兩吳本爲^ラ作^ル謂^ニ。『甲乙經』作^リ臂^ニ、校注^ニ云^フ、一^ニ作^ル肝^ニ。正統刊本正文作^リ肝^ニ、無^シ注。

【意訳】兩吳（吳悌・吳勉学）本は「爲」を「謂」に作る。『甲乙經』は「臂」に作り、校注に、一つに「肝」に作ると云。正統刊本文は「肝」に作り、注無し。

【史崧】肝、音^ハ早。

【意訳】肝、音は早（カン）。

『銅人』肝、脛^ノ之別名也。

【意訳】肝は、脛の別名である。

【張介賓】肝、足脛也。陽明^ノ之脉、自^リ膝膑^下脛骨^ノ外廉^ヲ。故^ニ爲^ス脛^ノ肝^ノ厥逆^ヲ。

【意訳】肝は、足の脛である。陽明の脈は、膝より脛骨の外廉を下る。故に脛の厥逆を為す。

是主^ル血所^レ生^{スル}病^者、

『靈樞』(L5-3a-02) 『太素』(P.100-13) 同。

【楊上善】陽明^ノ主^リ肉^ヲ、血^ハ爲^ス肉液^ヲ。故^ニ亦主^ル血^ヲ也。

【意訳】陽明は肉を主り、血は肉の液である。故にまた血をも主る。

【張介賓】中焦^ハ受^レ穀^ヲ、變化^シ而赤^ク爲^ル血^ト。故^ニ陽明^ハ爲^リ多^ク氣^多血^ノ之^ノ經^ト、而主^ル血所^レ生^{スル}病^者。

【意訳】中焦は飲食物を受け、変化して赤く血となる。故に陽明は多気多血の経であり、血が生ずる所の病を主るものである。

【張志聰】本經^ニ曰^ク、穀入^リ于^ニ胃^ニ、脉道^以通^シ、血氣^乃行^{ルト} (L5-01a-06)。平脉篇^ニ曰^ク、水入^リ于^ニ經^ニ、而血^乃成^{ルト}。胃^ハ爲^シ水穀^ノ之^ノ海^ト、主^ル生^{スル}此^ノ榮^血。故^ニ是^レ主^ル血所^レ生^{スル}病^者。

【意訳】本經『經脈篇』に曰う「穀 胃に入り、脉道以て通じ、血氣乃ち行る」(L5-01a-06)と。平脉篇に曰う「水 經に入りて、血乃ち成る」と。胃は水穀の海と為し、この榮血を生ずるを主る。故に血の生ずる所の病を主るのである。

注①『傷寒論』平脉篇第二：「寸口^ノ脈微^ニ而緩^ニ。微^{ナル}者^ハ衛氣^疎。疎^{ナル}者^ハ其^ノ膚^空。緩^{ナル}者^ハ胃氣^實。實^{スル}則^チ穀消^シ而水化^ス也。穀入^レ於^ニ胃^ニ、脉道^乃行^リ、水入^レ於^ニ經^ニ、其^ノ血^乃成^ル。榮盛^ニ（衛氣^疎）、則^チ其^ノ膚^必疎^{ナリ}。三焦^絶經^ノ、名^曰血崩^ト」。

狂^シ瘧^ノ【一作^ル瘧^ニ】温淫^ノ汗出^ヲ、

『靈樞』(L5-3a-02) 『太素』(P.100-13) 狂^シ瘧^ノ温淫^ノ汗出^ヲ、

【楊上善】淫^ハ過^ク也。謂^フ傷寒^熱病[、]温病^過甚^ク、而熱^ハ汗出^ツ也。

【意訳】淫は、過ぎること。傷寒熱病や温病で、病状が甚しく重く、発熱して汗が出ることを謂う。

【張介賓】陽明熱勝 則狂^シ、風勝^{ツツハ} 則瘧^シ、溫氣淫洩^{スルツツハ} 則汗出^ツ。

【意訳】陽明病で、熱邪が勝ると狂い、風邪が勝ると瘧し、温気が蔓延（淫洩）すると発汗する。

【張志聰】胃氣熱^シ而蒸^シ、水液^ノ之汗^ヲ也。

【意訳】胃氣が熱を持ち、水液の汗を蒸発させるのである。

𦘔𦘔口喎唇緊

注①緊：『字通』古訓・戒む、咎、忌む、病む。

『靈樞』(L5-3a-02)『太素』(P.100-14) 𦘔𦘔口喎唇緊、

【楊上善】脣^①、脣^ノ癢瘡。音緊。

注①脣：『大漢和辭典』くちひび、はれもの、かさ。

【意訳】「脣」は、唇の痒瘡。音は緊（キン）。

『銅人』脣、謂^フ脣瘍^一也。

【意訳】「脣」は、唇の瘍（瘡）。はれもの・かさ・ただれを謂う。

【馬蒔】脈循^リ鼻外^一、俠^レ口環^レ唇^一。

【意訳】胃脈は鼻外を循り、口を挟んで唇を環る（ので、この症状が出る）。

（『靈樞註証發微』馬注「爲唇脣^{〔環唇〕}」。）

【張志聰】脣、疹^ニ同。脣瘍也。

【意訳】「脣」は、疹に同じ。唇の瘍である。

【多紀元簡】〈志聰〉注、本^ニ于『説文』^一。

【意訳】張志聰の注は、『説文』に基づいている。

（『説文解字』脣：「脣瘍也。从肉參聲」）

頸腫喉痺

『靈樞』(L5-3a-03)『太素』(P.100-14) 同。

【馬蒔】循^リ頤出^テ大迎^ニ、循^リ喉嚨^一入^レ缺盆^ニ。

【意訳】頤を循り大迎に出て、喉嚨（のど仏）を循り欠盆に入る（ので、この症状が出る）。

（『靈樞註証發微』馬注「爲頸腫^{〔循頤出大迎〕}爲喉痺^{〔入缺盆〕}」。）

大腹水腫

『靈樞』同。(L5-3a-03)

『太素』腹外腫 (P.101-02)

【楊上善】陽明一道行^ニ於腹外^一、一道行^ニ於腹内^一。腹内水穀行^リ通^{スル}故^ニ、少^{ナシ}爲^ス腫^一。腹外衛氣數壅^カ故^ニ、腹外多^キ腫^一也。

【意訳】陽明経の一つの道は腹外を行き、一つの道は腹内を行く。腹内は水穀が行り通じているので、腫に為ることは少ない。腹外は衛氣の流れがしばしば壅がるので、腹外は腫れることが多い。

『銅人』胃爲^ニ水穀^一之海^一。氣虛弱 則不能^ハ傳^ニ化^一。水穀^一、令^ニ水腫^一、因^テ而留^ニ滯^一腸胃之間^一。其腫大^{ナル}故^ニ、曰^フ大腹水腫^一。

【意識】胃は水穀の海である。気が虚弱だと水穀を伝化することができず水腫となり、腸胃の間は留滞してしまう。その腫れが大きいので、大腹水腫と曰う。

【張介賓】胃在_ニ中焦_ニ。土病_{ムナハ}則_チ不_レ能_ハ制_{スルコト}水_ヲ也。

【意識】胃は中焦に在る。土が病むと水を制御することができなくなる。

膝臏腫痛_シ、

『靈枢』(L5-3a-03)『太素』(P.101-02) 同。

【馬蒔】膝臏_ハ、本經穴_{ナリ}。

【意識】膝臏は、胃経の經穴(犢鼻)である。

循_ニ膺_、乳、氣街、股、伏兔、胛_、外廉、足跗_、上_、皆痛_、

『靈枢』循膺、乳、氣街、股、伏兔、胛_、外廉、足跗_、上_、皆痛_、(L5-3a-03)

『太素』循膺、乳、街、股、伏兔、胛_、外廉、足跗_、上_、皆痛_、(P.101-03)

【澁江抽齋】『大素』無_ニ氣字_、、『銅人』同。『大素』胛_ヲ作_リ胛_ニ、『甲乙經』『銅人』同。

【意識】『太素』に「氣」字無く、『銅人』も同じ。『太素』は「胛」を「胛」に作り、『甲乙經』『銅人』も同じ。

【楊上善】上_、七處_、並_ヒ是_レ足_、陽明脉_、所_レ過_、故_ニ循_{リテ}上_、七處_、痛_ム者_、是_レ陽明脉_、病也。股_、髀内_、陰股也。

【意識】上の七ヶ所は、並びに足の陽明脈の過ぎる所であから、この七ヶ所を循つて痛むものは、陽明脈の病である。股とは、大腿の内側である。

『銅人』胸傍_ヲ曰_ヒ膺_、膺下_ヲ曰_フ乳_ト。街_{トハ}、謂_フ氣衝_ト。

【意識】胸傍を膺と曰い、膺の下を乳と曰う。街とは、氣衝を謂う。

【馬蒔】膺_{トハ}、膺窓等_ノ處。乳_{トハ}、乳中乳根。氣街_{トハ}、即_チ氣衝。股_{トハ}、梁丘陰市等_ノ處。伏兔_、本經穴。胛_、外廉_{トハ}、三里_、而下等_ノ處。足跗_、上_{トハ}、陷谷衝陽解谿等_ノ處。

【意識】膺とは、膺窓等の処。乳とは、乳中・乳根のこと。氣街とは、即ち氣衝。股とは、梁丘・陰市等の処。伏兔は、本経の經穴。胛の外廉とは、三里より下の処。足跗の上とは、陷谷・衝陽・解谿等の処である。

中指不用_{イラレ}。

『靈枢』(L5-3a-04)『太素』(P.101-04) 同。

【楊上善】足_、中指_、内外間_、陽明脉_、支所_レ至_、故_ニ脉病_、中指不_レ用_イ也。

【意識】足の第三趾(中指)の内外側は、陽明の支脈の至る所である。故にこの脈が病めば、第三趾は使えなくなる。

氣盛_シ則_チ身以前皆熱_シ、

『靈枢』(L5-3a-04)『太素』(P.101-06) 同。

【楊上善】足_、陽明_、脉_、唯行_{ルノミ}身_ヲ前_ヲ。故_ニ脉盛_シ、身_ノ前_ノ皆熱_ス也。

【意識】足の陽明の脈は、身体前面を行る。故に脈が盛んになれば、身前は皆熱する。

其有^レ餘^リ于胃^ニ、則消^シ穀^ヲ善^ク饑^エ、溺色黃^ム。

『靈樞』同。(L5-3a-05)

『太素』其有餘^リ於胃^ニ、則消穀善^ク飢^エ、溺色變^ム。(P.101-06)

【張介賓】此陽明實熱^ニ、在^レ經^ニ、藏^ニ之辨^チ也。

【意識】これは陽明の実熱であり、經に在るか、藏に在るかの違いがある。

【張志聰】陽明氣盛^シ、于外^ニ、則身^ヲ前^ヲ以^テ皆熱^ス。盛^シ于内^ニ、則有^リ餘^リ于胃^ニ。(而消^シ穀^ヲ善^ク飢^エ、溺色黃^ム。)

【意識】陽明の気が外部で盛んだと、身体の前部が皆熱する。内部で盛んだと、胃に余りがある。(そして飲食物を消化してよく飢え、尿の色は黄ばむ。)

【馬蒔】胃熱下入^ニ、膀胱^ニ。

【意識】胃熱は下って膀胱に入る(ので尿が黄色くなる)。

氣不^レ足^ラ則身^ヲ前^ヲ皆寒慄^シ、

『靈樞』(L5-3a-05) 『太素』(P.101-08) 同。

『銅人』腹^ヲ爲^シ陰^ト、背^ヲ爲^シ陽^ト。足陽明行^ル身^ノ陰^ヲ。其氣盛^シ、故身^ヲ前^ヲ皆熱^ス。其氣不^レ足^ラ、故身^ヲ前^ヲ皆寒慄^シ。善行^ル身^ノ陽^ヲ者、足太陽之謂也。

【意識】腹を陰とし、背を陽とする。足の陽明は身体の陰を行る。その気が盛んであれば、身体の前部は皆熱する。気が不足であれば、身体の前部が皆寒慄する。よく身体の陽部を行るのは、足の太陽である。

胃中寒^ス則^チ脹滿^ス。

『靈樞』(L5-3a-06) 『太素』(P.101-08) 同。

【張介賓】此陽明虛寒^ニ、在^レ經^ニ、藏^ニ之辨^チ也。

【意識】これは陽明の虚寒であり、經に在ると藏に在るとの違いがある。

爲^ス此諸病^ヲ、盛^シ者則人迎大^{ナルコト}三倍^ニ於寸口^ニ、虛^ス者則人迎反小^{ナルコト}於寸口^ニ也。

『靈樞』爲此諸病、盛則寫^シ之、虛則補^フ之、熱則疾^ク之、寒則留^ル之、陷下則灸^ス之、不盛不虛、以經取^リ之。盛者人迎大三倍^ニ于寸口^ニ、虛者人迎反小于寸口也。(L5-3a-06)

『太素』爲此諸病、盛則寫^シ之、虛則補^フ之、熱則疾^ク之、寒則留^ル之、陷下則灸^ス之、不盛不虛、以經取^リ之。盛者則人迎大三倍^ニ於寸口^ニ、虛者則人迎反小^{ナルコト}於寸口也。(P.101-10)

【馬蒔】人迎較^{ヘテ}寸口^ノ之脉^ニ、大^{ナルコト}者三倍^ニ、則胃經爲^ス實^ト。如^ク終始篇^ニ所^レ謂^フ、寫^シ足陽明胃^ヲ、而補^フ足太陰脾^ヲ者、是也。人迎較^{ヘテ}寸口^ノ之脉^ニ小^{ナルコト}者三倍^ニ、則胃經爲^ス虛^ト。如^ク終始篇^ニ所^レ謂^フ、補^フ足陽明胃^ヲ、而寫^シ足太陰脾^ヲ者、是也。

【意識】人迎の脈が寸口に較べて、三倍大きい場合は、胃經の実とする。『終始篇』に謂う、足の陽明胃經を補して、足の太陰脾經を瀉すとは、このことである。人迎の脈が寸口に較べて三倍小さい場合は、胃經の虚とする『終始篇』に謂う、足の陽明胃經を補して、

足の太陰脾経を瀉すとは、このことである。

脾足、太陰之脉、起於大指之端、

『靈枢』脾足太陰之脈、起于大指之端 (L5-3a-09)

『太素』同。(P.101-12)

『銅人』大指の内側、(隱白)所居。素問曰、太陰之根、起於隱白 (S2-12b-03)。

【意訳】大指の内側には隠白が在る。『素問』篇第六陰陽離合論に「太陰の根は、隠白に起る」と曰う。

【滑壽】足、太陰、起於大指之端、隱白穴、受足陽明之交也。

【意訳】足の太陰は大指の端の隠白穴に起り、足の陽明の氣と交わり受け継ぐ。

【張介賓】足之三陰、從足走腹。故足、太陰、脉發於此。凡後、足三陰經、皆然。

【意訳】足の三陰経は、足から腹に走る。故に足の太陰の脈はここより発する。足の三陰経は皆そうである。

循指内側白肉際、

『靈枢』(L5-3a-09)『太素』(P.101-13) 同。

【滑壽】〈大都〉穴。

【意訳】大都穴である。

過核骨後、

『靈枢』(L5-3a-10)

『太素』過覈骨後 (P.101-13)

【楊上善】覈、胡革反。人足大指本節後骨、名爲覈骨也。

【意訳】覈、胡革の反(カク)。足の親指の中足趾節關節(本節)の後の骨を、名付けて覈骨という。

『銅人』核骨之下、太白所居焉。

【意訳】核骨の下には、太白が在る。

【滑壽】覈骨、一作核骨。俗云、孤拐骨、是也。

【意訳】覈骨は、一つに核骨に作る。俗に孤拐骨と云うのが、これである。

【樓英】『綱目』云、核骨、在足大指本節後約二寸、内踝骨前約三寸、如棗核、横于足内側赤白肉際者、是也。寶大師指、孤拐骨、非是也。

注①寶大師・寶默(一一九六〜一二八〇)『鍼經指南』鍼經直説「核骨(孤拐骨、是也)。

早名は傑。字は漢卿。のちに名を默、字を子声に改める。元の世祖に仕え、魏国公に封ぜられる。亡くなってから太師号を贈られたので、寶大師と称される。

【意訳】『医学綱目』に云う「核骨は足の親指の中足趾節關節の後約二寸、内踝の骨の前約三寸に在り、棗の実のような形で、足の内側の赤肉と白肉の境に横たわっているものが、それである。寶大師が孤拐骨とするのは、正しくない」と。

【張介賓】核骨、即大指本節後内側圓骨也。滑氏言爲孤拐骨者、非。蓋

孤拐トハ即名チニ踝骨ニ。古有ニ撃ツノ踝ヲ之說一。即チ今北人所ノ謂フ打ツト孤拐一也。核骨ハ惟一ナルモ、踝骨ハ則チ有リ内外ノ之分一。滑氏以テ足跟骨一爲ス踝者ト、亦非ナリ。蓋シ彼レ曰フ跟踵ト、非レ踝ニ也。

【意訳】核骨とは即ち足の親指の中足趾節関節の後内側の円い骨である。滑寿が孤拐骨と言うのは正しくない。そもそも孤拐とは即ち踝骨を名付けていう。昔踝を撃つという説があった。即ち現在北方の人が謂う所の「孤拐（踝）を打つ」ことである。核骨はただ一つだが、踝骨は内踝と外踝が有る。滑寿は足跟骨を踝とするが、これもまた誤りである。そもそも彼が曰う跟踵（かかと）は踝（くるぶし）ではない。

【沈形】『釋骨』ニ云フ、大指本節ノ後ノ、在ル内側ニ如キ核ノ者ヲ、曰フ核骨ト。

注①沈形（シントウ）…一六八八〜一七五二年。字は冠雲、又字は果堂。江蘇吳江人。『釋骨』は、『内経』に見える骨を解釈したもの。

【意訳】『釈骨』に云う「大指本節の後の内側に在る、さねのようなものを、核骨と曰う」と。

上ニ内踝ノ前廉ヲ、

『靈枢』(L5-3a-10)『太素』(P.101-14)同。

『銅人』商丘居ニ此内踝ノ之前一。

【意訳】商丘はこの内踝の前に在る。

【滑壽】過キ核骨ノ後ヲ、歷テ太白ノ（公孫）商丘ヲ、上ル内踝前廉ノ之（三陰交）也。足跟ノ後兩旁ノ起骨ヲ爲ス踝骨ト。

【意訳】核骨の後を過ぎり、太白、公孫、商丘を歴て、内踝前廉の三陰交に上る。足の跟の後の両傍の隆起した骨を踝骨という。

【楊上善】十二經脉ハ、皆行ル筋肉骨間ヲ、唯此ノ足ノ太陰經ニ、上リ於内踝薄肉ノ之處一、脉得ル見ル者也。

【意訳】十二經脉は皆筋肉骨間を行るが、ただこの足の太陰経だけは、内踝の薄肉の処を上るので、脈を診ることができる。

上ニ腓内ヲ、循リ腓骨ノ後ヲ、交ハ出厥陰ノ之前ニ、

『靈枢』上腓内ニ、循脛骨後ニ、交出厥陰之前一、(L5-3a-10)

『太素』上腓内ニ、循脛骨後ニ、交出厥陰之前一、(P.101-14)

【楊上善】脛後ノ腓腸ヲ、名ツケテ端ト。太陰從リ内踝一上行ス八寸、當リ脛骨ノ後ニ、交ハ出厥陰ノ之前ニ上行ス。

【意訳】脛の後のふくらはぎ（腓腸）を、名付けて端という。太陰脾経は内踝から八寸上行して、脛骨の後に当たり、厥陰肝経の前に交わり出て、上行する。

『銅人』端ト、謂フ脛ノ之魚腹一也。厥陰行リ太陰ノ之前一、至ニ腓骨ノ之後ニ、而太陰復リ在リ其前ニ。

【意訳】端とは、脛の魚腹（腓腹筋）を謂う。厥陰は太陰の前を行り、腓骨（脛骨）の後に至って、太陰が反対に厥陰の前に在る。

【滑壽】端ト、腓腸也。由リ三陰交一、上リ腓内ヲ、循リ腓骨後ノ之（漏谷）、上行ス。

一寸、交^{ハリ}、出^テ足^ノ厥陰^ノ之前^ニ、至^ル地機^ノ（陰陵泉）。

【意訳】踰とは、ふくらはぎである。三陰交から、踰内を上り、胫骨（脛骨）の後の漏谷を循り、二寸上行して、足の厥陰の前に交わり出て、地機、陰陵泉に至る。

【張介賓】踰、足肚也。亦名腓腸。本經與踰通用。音篆。蓋踰、本音煨。【玉篇】以^テ足跟^ヲ爲^ス踰。

【意訳】踰とは足肚である。また腓腸とも名付く。本經の「踰」と「踰」とは通用する。音は篆（テン）。そもそも「踰」は、本来音は煨（カ）である。『玉篇』は足跟を踰とする。

【多紀元簡】『説文』、踰、腓腸也。

【意訳】『説文』に、「は腓腸である」と。

上^テ循^リ膝股内^ノ前廉^ヲ、入^リ腹屬^シ脾絡^ニ胃^ヲ、

【靈樞】上^ニ膝股内前廉、入^レ腹屬脾、絡胃、（L5-3b-01）

【太素】上循膝股内前廉、入股屬脾、絡胃、（P.102-01）

【澁江抽齋】『銅人』同^シ『大素』、『甲乙經』、膝^ノ上^ニ有^リ循字^一。

【意訳】『銅人』には、『太素』、『甲乙經』と同じく、「膝」の上に「循」字が有る。

【楊上善】膝内^ノ之股、近^キ膝^ニ名^{ツケ}膝股^一、近^キ陰處^ニ爲^ス陰股^一也。

【意訳】膝の内股は、膝に近いものを膝股と名付け、陰部に近いものを陰股とする。

【銅人】膝下内側^ハ陰陵泉^ノ所^{ナリ}在^ル焉。

【意訳】膝下内側には陰陵泉が在る。

【張介賓】前廉^{トハ}上側^也。

【意訳】前廉とは、上側である。

【滑壽】脾内^ヲ爲^シ股^ト、臍^ノ上下^ヲ爲^ス腹^ト。自^リ陰陵泉^一、上^テ循^リ膝股内前廉^ノ之^ハ血海^ノ

（箕門）^ヲ、迤邐^{入^リ腹^ニ、經^テ衝門^ノ（府舍）^ヲ、會^シ中極[、]關元^ニ、復^テ循^リ腹}

結^ノ（大横）^ヲ、會^シ下腕^ニ、歷^ニ腹哀^ノ、過^キ日月^ノ（期門）^ノ之分^ヲ、循^リ本

經^ノ之裏^ヲ、下^テ至^リ中腕[、]下腕^ノ之際^ニ、以^テ屬^シ脾絡^ヲ胃^ヲ也。中極[、]關元[、]皆^ニ足^ニ三

陰任脉^ノ之會[、]下腕[、]足[、]太陰任脉^ノ之會[、]日月[、]足[、]太陰少陽陽維^ノ之會[、]期門[、]足[、]太

陰厥陰陰維^ノ之會^也。

注①迤邐…連なり続く様。また斜めに歩行する。道を歩くのに彼方此方へつたい行くこと。

（『大漢和辭典』）

【意訳】大腿内部を股とし、臍の上下を腹とする。陰陵泉より上って膝と大腿内部の前面の血海と箕門を循り、連なり続いて腹に入り、衝門、府舍を経て、中極、關元に會し、また腹結、大横を循り、下腕に會し、腹哀を歴て、日月、期門を過ぎり、本經の裏を循り、下って中腕、下腕の際に至り、脾に屬し胃を絡う。中極、關元は、共に足の三陰と任脈との交会穴、下腕は、足の太陰と任脈との交会穴、日月は、足の太陰、少陽、陽維との交会穴、期門は、足の太陰、厥陰、陰維との交会穴である。

上^リ膈[、]俠^レ咽[、]連^{ナリ}舌本[、]散^ル舌下^ニ。

【靈樞】上膈、挾咽、連舌本、散舌下。（L5-3b-01）

『太素』同。(P.102-02)

【滑壽】咽、所_レ以_レ嚥_ム物者、居_ニ喉_ノ之後_ニ。「原作_ル前_ニ。今從_レ」(張氏)『類經』改_ム。至_ニ胃_ノ長_一一尺六寸、爲_ニ胃系_ト也。舌本_{トハ}、舌根也。由_ニ腹_ノ哀_一、上_レ膈_ニ、循_ニ食_ノ竇_ト、(天谿) (胸鄉) (周榮) 由_ニ周榮_一、外_ニ曲折_レ向_レ下_ニ、至_ニ大包_ト。又自_ニ大包_一、外_ニ曲折_レ向_レ上_ニ、會_ニ中府_一、上行_レ行_ニ人迎_ノ之裏_一、挾_レ咽_ヲ、連_ニ舌本_一、散_ニ舌下_一而終_ヲ焉。

【意訳】咽は、物を嚥み込む処で、喉の後に在る。「元は「前」に作る。今張介賓『類經』に従い改める。」胃に至る長さ一尺六寸は胃系である。舌本とは、舌根のこと。腹哀から横隔膜に上り、食竇、天谿、胸郷、周榮を循り、周榮より外に曲折して下に向い、大包に至り、また大包より外に曲折して上に向い、中府に会し、上行して人迎の裏を行り、咽を挟み、舌本に連なり、舌下に散じて終わる。

其_ノ支_{ナル}者、復_レ從_レ胃_別上_レ膈_ニ、注_ニ心中_一。

『靈枢』(L5-3b-02) 『太素』(P.102-03) 其支者、復從胃別上膈、注心中。

【滑壽】此_ノ支_ハ由_ニ腹_ノ哀_一別行_シ、再_レ從_ニ胃_ノ部_ノ中_ノ腕_ノ穴_ノ之_レ外_一、上_レ膈_ニ、注_ニ於_ニ膻_ノ中_ノ之_レ裏_一、心_ノ之_レ分_ニ、以_テ交_ニ於_ニ手_ノ少_ノ陰_一。

【意訳】この支脈は腹哀から別行して、再び胃の中腕穴の外より、横隔膜に上り、膻中の裏の心の領域に注ぎ、手の少陰に交わる。

【張介賓】足_ハ、太陰_外行者_ハ、由_ニ腹_ノ之_レ四行_一、上_レ府_ノ舍_ノ腹_ノ哀_等ノ穴_ニ、散_ニ於_ニ胸_ノ中_一、而止_ニ於_ニ大包_一。其_ノ内_ヲ行_テ而支_{カル}者_ハ、自_ニ胃_ノ腕_ノ別_レ上_レ膈_ニ、注_ニ於_ニ心_ノ中_一、而接_ニ乎_ニ手_ノ少_ノ陰_ノ經_一也。

【意訳】足の太陰の外を行るものは、腹部四行線の府舍、腹哀等の穴を上り、胸中に散じて大包に終わる。その内を行って枝分かれするものは、胃腕より別れて横隔膜に上り、心中に注ぎ、手の少陰経に接続する。

是_レ動_{スル}者、則_チ病_チ舌_ノ本_ノ強_ハ、

『靈枢』同。(L5-3b-02)

『太素』是動、則病舌強 (P.102-03)

【澁江抽齋】坊本、上_ニ衍_ス脾_ノ足_ノ大_ノ陰_也五_ノ字_ヲ。

【意訳】坊本『靈枢』は、上に「脾足大陰也」の五字を衍す。

【張介賓】脾脉_ハ連_ニ舌_ノ本_一。故_ニ強_{スル}。

【意訳】脾脈は舌本に連なるので、舌本が強ばる。

食_{スル}者、則_チ嘔_シ、

『靈枢』同。(L5-3b-3)

『太素』食則嘔 (P.102-4)

『銅人』素問〔脉解篇〕「所謂食_ハ、則_チ嘔_ス者、物盛滿_ニ而上_ニ溢_ス。故_ニ嘔_{スル}也」。 (S13-12a-1)

【意訳】『素問』脈解篇第五十四に「所謂食すれば則ち嘔すとは、飲食物が盛んに満ちて、上に溢れるので、吐くのである」と。

【張介賓】脾病^{ムチハ} 則^チ不^レ運^セ。故^ニ嘔^ス。

【意識】脾が病むと運化（水穀精微の生成＝消化吸収）ができなくなるので、吐く。

胃脘痛^ミ、

『靈樞』(L5-3b-3) 『太素』(P.102-4) 同。

『銅人』以^テ其^ノ脉絡^ヲ胃^ヲ故^{ナル}耳^ニ。

【意識】その脈が胃を絡っているからである。

腹脹^リ、

『靈樞』(L5-3b-3) 『太素』(P.102-4) 同。

『銅人』素問「脉解篇」^ニ、所謂病^{ムトハ}脹^ラ者、太陰^ノ子也。十一月萬物^ノ氣皆藏^{サル}於^ニ中^ニ。故^ニ曰^フ病^{ムト}脹^ラ。(S13-11b-7)

【意識】『素問』脉解篇第五十四に「所謂脹を病むとは、太陰は十二支の「子」であり、十一月は万物の気が皆中に蔵されるので、脹を病むと曰う」と。

【馬蒔】脉入^レ腹^ニ。

【意識】脈が腹に入るからである。

善噫^ス。

『靈樞』(L5-3b-3) 『太素』(P.102-4) 同。

『素問』脉解篇^ニ云^フ、所謂上走^テ心^ニ爲^ス噫^ラ者、陰盛^シ而上走^ル於^ニ陽明^ニ。陽明^ノ絡屬^ス心^ニ。故^ニ曰^フ上走^テ心^ニ爲^ス噫^ラ也。(S13-11b-8)

【意識】『素問』脉解篇第五十四に云う「所謂上って心に走り噫を為すとは、陰気が盛んで、上って陽明に走り、その陽明が心を絡うので、心に走って噫（げっぷ）をするのである」と。

【馬蒔】本經口問篇^ニ、寒氣客^シ于^ニ胃^ニ、厥逆從^リ下上散^リ、復出^ツ于^ニ胃^ニ。故^ニ爲^ス噫^ラ。

注①『靈樞』口問篇第二十八「黄帝曰、人之噫者、何氣使然。岐伯曰、寒氣客^シ于^ニ胃^ニ、厥逆從^リ下上散^リ、復出^ツ于^ニ胃^ニ。故^ニ爲^ス噫^ラ。補^シ足太陰陽明^ニ。一曰補^シ眉本也。」(L10-6b-9)

【意識】『本經』口問篇に「寒氣胃に客し、厥逆下より上って散り、また胃に出づ。故に噫を為す」と。

得^ル後與^ラ氣、則快然^ト而衰^ク、

『靈樞』得後與氣、則快然如衰、(L5-3b-3)

『太素』得後出^ル餘氣、則快然如衰、(P.102-5)

『銅人』素問^ニ、所謂得^ル後與^ラ氣^ニ則^チ快然^ト如衰^ク者、十一月『靈樞講義』による。『銅人』は「十二月」に作る。陰氣下衰^リ而陽氣自出^ツ。故^ニ病如^シ是^ト。

注①所謂得後與氣則快然如衰者、十二月陰氣下衰而陽氣且出。故曰得後與氣則快然如衰也。

(S13-12a-2)

【意識】『素問』脉解篇第四十九に「所謂大便と放屁があれば、すっきりして症状は軽減

するのは、十一月（十二月）には陰気が下に衰えて、陽気が自然と出てくるので、病状はこのように変化する」と。

【馬蒔】去_レ後_ヲ泄_{ラスハ}氣_ヲ、脾氣輪泄_{スレハナリ}。

【意訳】大便と放屁が出るのは、脾気が泄らすからである。

【靈樞註証發微】馬蒔「得後_去」與氣_氣則快然如衰_{脾氣}。『靈樞』禁服…「夫約_レ方者、猶_レ約_レ囊也、囊滿而弗約、則輸泄_{（L15-16-9）}。外に漏れ出る・漏らす。」

【張介賓】後_ハ謂_ニ大便_ヲ、氣_ハ謂_ニ轉失氣_ヲ。陽氣出_{ツルナリ}、則_チ陰邪散_ル。故_ニ快然_ト如衰_フ。

一陽下動_{スルハ}、冬至_ノ候也。故_ニ應_ニ十一月_ノ之氣_ニ。〔出_ツ脈解篇注_ニ〕

【意訳】「後」は大便を謂い、「氣」は転失気（放屁）を謂う。陽気が出ると、陰邪は散る。故にすっきりと軽減する。一陽が下に動ずるのは、冬至の候である。故に十一月の氣に応ずるのである。『類經』卷十四・十一脈解篇注にあり。）

【多紀元簡】甲乙經、如_ヲ作_ル而_ニ。而如古通_ス。

【意訳】『甲乙經』は、「如」を「而」に作る。「而」と「如」は古くは通用した。

【澁江抽齋】『大素』「得後與氣_ヲ作_ル」得後出餘氣_ニ。〈楊上善〉曰_ツ、穀入_リ胃_ニ已_ハ、其_ノ氣上_テ爲_ニ營衛及_ヒ臆中_ノ氣_ト。後_ニ有_リ下行_ニ與_ニ糟粕_{俱_ニ下_者、名_曰餘氣}ト。餘氣_下與_ニ糟粕_{俱_ニ下_上、壅_レ而爲_レ脹、今得_レ之_ヲ洩_レ之_ヲ。故_ニ快然_ト腹減_{スル}也。〔楊上善は「後」を「大便」ではなく、ふつうに時間としての「後」と解釈している〕}

【意訳】『大素』は「得後與氣」を「得後出餘氣」に作り、楊上善は曰う、「飲食物が胃に入り終わり、その気が上って營衛及び臆中の氣となる。その後下行して、その糟粕と共に下るものがある。それを名づけて余氣（余った氣）と曰う。余氣が糟粕と共に下らず、塞がって腹が脹っていたが、今それを得て洩らしたので、すっきりと腹の脹りが減ったのである」と。

身體皆重_シ。

【靈樞】(L5-36-4) 『大素』(P.102-7) 同。

【楊上善】身及_ヒ四支_ハ、皆是_レ足_ノ太陰_ノ脉_{、行_ニ胃氣_一營_レ之_ヲ。若_シ脾病_{メハ}、脉即_チ不_レ營_セ、故_ニ皆重_キ也。}

【意訳】体幹と四肢には、皆足の太陰の脈が胃気を行らして營養している。もし脾が病めば、脈が（体幹と四肢を）營養しなくなり、身体は皆重くなる。

【銅人】以_テ脾_{主_ル肉_ヲ、故_ニ脾病_{ムサハ}、則_チ身體重_シ。}

【意訳】脾は肉を主るので、脾が病めば身体は重くなる。

是主_レ脾_ノ所_レ病_者、舌本痛_ム、

【靈樞】(L5-36-4) 『大素』(P.102-8) 是主脾所生病者、舌本痛、

【楊上善】太陰_ノ脉行_ニ至_ニ舌下_ニ。故_ニ舌本痛_ム也。

【意訳】太陰の脈は行って舌下に至る。故に舌本が痛む。

【馬蒔】上_ニ舌本強_ハ、而此_レ則_チ甚_ト。

【意訳】上文（のは是動病）では「舌本が強ばる（是動、則舌本強）」といい、ここ（の所生病／所主病）では「甚だしい」という。

體不能動搖^{スルロト}、

『靈樞』(L5-3b-4)『太素』(P.102-08) 同。

【馬蒔】即上文重^ク而甚^キ者^{ナリ}。

【意訳】即ち上文の(是動病に「身体皆重し」とある)体が重いものがひどい状態である。

食不下^ラ、

『靈樞』(L5-3b-05)『太素』(P.102-9) 同。

【馬蒔】不^レ但^ク嘔^セ而^レ已^ル。

【意訳】ただ吐かないだけのことだ。

煩心^シ、心下急^シ、寒瘧^シ、

『靈樞』(L5-3b-5)『太素』(P.102-09) 煩心、心下急痛^シ、

【楊上善】脾脈注^ク心中^ニ。故^ニ脾生^{スレバ}病^ヲ、煩心^ハ心急痛^{スル}也。

【意訳】脾脈は心中に注ぐので、脾が病を生ずれば、煩心して心が急痛する。

【澁江抽齋】『銅人』、『甲乙經』同^シ、下有^ニ寒瘧^ノ二字^一。

【意訳】『銅人』は『甲乙經』と同じく、下に「寒瘧」の二字が有る。

澹^シ、瘕^シ【音加】^シ、泄^シ、

『靈樞』同。(L5-3b-5)

『太素』澹^シ、瘕^シ、洩^シ(P.102-10)

【澁江抽齋】兩吳本注^ニ、瘕^ハ音加^ト。

【意訳】兩吳本注に「瘕、音は加」と。

【楊上善】澹^シ、食消^シ、利也。瘕^ハ、食不消^セ、瘕^ハ而爲^ス積病^ヲ也。洩^ハ、食不消^セ、滄洩^{スル}也。

【意訳】「澹」とは、飲食物を消化はするが、下痢するものである。「瘕」とは、飲食物を消化できずに下痢するものである。

『銅人』按^ニ、『甲乙經』作^ル澹泄疾^ニ。「今本與^ニ本經^一同^シ。」澹泄^{トハ}、謂^フ如^キ鴨^ノ之澹^一也。素問^ノ所謂^{ボク}驚澹^{トハ}、者是^レ泄^{ナリ}矣。

注①『素問』氣交變大論篇第六十九「病^メ驚澹^ハ、腹滿^チ、食飲不^レ下^ラ、寒中^{タリテ}、腸鳴^{リテ}泄^シ、腹痛^シ、暴^{カニ}攣^{リテ}、痿痺^シ、足不^レ任^タ身^ニ。」(S20-6b-04)「病めば、しきりに続く下痢になり、腹が張り、飲食物が飲み込めず、腹が冷えて鳴り、大便は水を注ぐように下り、腹が痛み、両足が急に攣り、萎縮して痺れ、歩くことができなくなる。」(『現代語訳素問』下巻一一四頁)

【意訳】按ずるに、『甲乙經』は「澹泄疾」に作る。(今本は本經と同じ。)
「澹泄」とは、鴨の澹(泥状の糞便)のようなものを謂う。『素問』の所謂「驚澹」とは、これである。

【馬蒔】澹^{トハ}、脾氣不^レ實^セ。難經^①五十七難^ニ、有^リ大瘕泄^一。

注①『難經』五十七難「大瘕泄^ハ者、裏急後重^シ、數^ニ至^ル圜^ニ而^レ不^レ能^ハ便^{スル}、莖中痛^ム。此^レ五泄^ノ之要法也。」(NS4-32a-10)

【意識】「瀉」とは、脾気が実せず起こるものである。『難経』五十七難に、大瘕泄が有る。

【張介賓】脾寒 則爲瀉瀉。脾滯 則爲瘕瘕。脾病 不能制水。水則爲泄、爲水閉黃疸、不能臥。

【意識】脾が寒えると瀉瀉になる。脾が滯ると瘕瘕（腹内の痞塊）になる。脾が病んで水を制御できなくなると下痢になり、また水閉による黄疸になり、休めなくなる。

【李中梓】瀉者、水泄也。瘕者、痢疾也。

【意識】「瀉」とは、水泄（水様便の排泄）のことである。「瘕」とは、痢疾（腸滯、滯下ともいう）のことである。

水閉、

【靈枢】(L5-3b-5)『太素』(P.102-10) 同。『銅人』水下、

【楊上善】脾、所生病、不營膀胱。故小便不利也。

【意識】脾の所生病は、膀胱を營養できない。故に小便が通じなくなる。

【馬蒔】六元正紀大論、有甚則水閉跗腫。言水畜于内、而大小便皆閉也。

注①六元正紀大論「故風勝則動、熱勝則腫、燥勝則乾、寒勝則浮、濕勝則濡泄、甚則水閉附腫。」(S21-33b-05)

【意識】六元正紀大論に「甚しい場合は水が塞がって浮腫になる」とある。水分が体内に蓄積され、大小便は共になくなると言う。

【李中梓】水閉者、土病不能治水也。

【意識】「水閉ず」とは、土が病んで治水できないことである。

黃疸、不能食、唇青、

【靈枢】(L5-3b-5)『太素』(P.102-11) 黃疸、不能臥、

【楊上善】内熱身黃、病也。脾胃中熱、故不得臥也。

【意識】内熱して身体が黄ばむ病である。脾胃が熱するので、休めなくなる。

【馬蒔】素問平人氣象論、本經論疾診尺篇、皆有黃疸。

注①『素問』平人氣象論篇第十八「溺黃赤、安臥者、黃疸也。」(S05-11a-09)

注②『靈枢』論疾診尺篇第七十四「身痛、而色微黃、齒垢黃、爪甲上黃、黃疸也。」(L21-04b-07)

【意識】『素問』平人氣象論篇第十八と、『靈枢』論疾診尺篇第七十四に、黄疸が有る。

【李中梓】水閉 則濕熱壅、而爲疸、爲不臥。

【意識】水が閉じれば、湿熱が塞がり、黄疸となり、休めなくなる。

【澁江抽齋】『銅人』注、按甲乙經作「好臥不能食、肉唇青」。與今本不同。

【意識】『銅人』注に、按ずるに、『甲乙經』は「臥するを好み肉を食すること能わず、唇青し」に作ると。今本と違う。

強立 股膝内腫痛厥、

『靈枢』強立股膝内腫厥、(L5-3b-6)

『太素』強欠、股膝内腫厥、(P.102-11)

【楊上善】將欠、不得欠、名曰強欠。

【意訳】欠伸をしようとして欠伸ができないものを、名付けて強欠と曰う。

【馬蒔】血海箕門衝門等處。

【意訳】(股膝の内は) 血海、箕門、衝門等の処である。

【多紀元簡】強立、諸家不釋。蓋謂勉強而起立。則股膝内腫。

【意訳】「強立」を諸家は解釈していない。思うに無理をして立ち上がると、大腿内側が腫れることを謂うのだろう。

足大指不用。

『靈枢』同。(L5-3b-6)

『太素』大指不用。(P.102-12)

【馬蒔】隱白大都太白等處。

【意訳】(足の五指は) 隱白、大都、太白等の処である。

【張介賓】脾脉起於足拇、以上膝股内廉。故爲腫、爲厥、爲大指不用。諸病。

【意訳】脾脈は足の拇趾に起り、大腿内側を上る。故に腫を為し、厥を為し、拇趾を用いられない諸病を為す。

爲此諸病、盛者則寸口大三倍於人迎、虛者則寸口反小於人迎也。

『靈枢』爲此諸病、盛則寫之、虛則補之、熱則疾之、寒則留之、陷下則灸之、不盛不虛、以經取之。盛者寸口大三倍于人迎、虛者寸口反小于人迎也。(L5-3b-6)

『太素』爲此諸病、盛則寫之、虛則補之、熱則疾之、寒則留之、陷下則灸之、不盛不虛、以經取之。盛者則寸口大三倍於人迎、虛者則寸口反小於人迎也。(P.102-13)

【馬蒔】寸口較人迎之脉、大ナルコト者三倍、則脾經爲實。如終始篇所、寫足太陰脾、而補足陽明胃者、是也。寸口較人迎之脉、小ナルコト者三倍、則脾經爲虛。如終始篇所、謂補足太陰脾、而寫足陽明胃者、是也。

【意訳】寸口の脈が較人迎の脈に較べて、三倍大きい場合は、脾經の実とする。『終始篇』に謂う、足の太陰脾經を瀉して、足の陽明胃經を補すとは、このことである。寸口に較べて、人迎の脈が三倍小さい場合は、脾經の爲とする。『終始篇』に謂う、足の太陰脾經を補し、足の陽明胃經を瀉すとは、このことである。